

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.143

2005年4月

ニュース

平成16年度卒業式が挙行される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

ニュース	
平成16年度卒業式が挙行される	2
総長の辞（平成16年度大学院修了式）	4
総長の辞（平成16年度学部卒業式）	6
来賓祝辞 丹羽 宇一郎（名古屋大学全学同窓会副会長／伊藤忠商事株式会社代表取締役会長）	8
シンポジウム 名古屋発「グローバル時代の大学交流」開催	10
オフタイム	
忙中閑あり？ 総長 平野 眞一	11
知の先端	
生物学的に重要な天然有機化合物の探索研究	12
上村 大輔（大学院理学研究科教授／高等研究院流動教員）	
西洋主導の心理学に異議を唱える	14
高井 次郎（大学院教育発達科学研究科助教授）	
同窓生から	
パリダカでの優勝を車づくりに生かす	16
沼田 靖志（トヨタ車体㈱総務部広報室パリダカ推進グループ）	
学生の元気	
グリーンランド縦断を終えて	17
長谷 徹志（大学院環境学研究科博士後期課程2年）	
平成16年度名古屋大学総長顕彰 8名1団体表彰！	18
キャンパスクローズアップ	
法・経本館・共用館	20
世界につながる	
第51期留学生センター日本語研修コースが修了	22
部局ニュース	
公開シンポジウム「公と私の日本近代」開催	23
知的医用画像診断国際シンポジウム開催	23
名大機械・航空テクノフロンティア開催	24
国際シンポジウム「境界と文化創造」開催	24
メディアプロフェッショナル論講座公開シンポジウム開催	25
国際シンポジウム「文理融合型エコシステム科学の創成」開催	26
高等教育研究センター客員教授セミナー「名古屋大学のブランド力」開催	26
ICCAE2004年度第11・12回オープンセミナー開催	27
博物館が平成16年度地域貢献特別支援事業を実施	27
理学部の研究紹介ビデオが科学技術映像祭で文部科学大臣賞を受賞	28
小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会開催	28
名大を表敬訪問された方々 平成17年1月～3月	29
受賞者一覧	30
本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年3月	31
イベントカレンダー	34
ちょっと名大史	
東山キャンパス「田村模型」	36

平成16年度卒業式が挙行される





平成16年度名古屋大学卒業式が、3月25日（金）豊田講堂において挙行されました。午前10時からの修士・博士学位記授与式が、また、午前11時50分から学士学位記授与式が行われ、会場の豊田講堂は、卒業生で満員となりました。

名古屋大学交響楽団による「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲（ワグナー作曲）の演奏で始まった式典では、平野総長から学部卒業生2,154名に学士学位記が、修士課程及び博士課程前期課程修了生1,604名に修士学位記が、博士課程及び博士課程後期課程修了生235名に博士学位記がそれぞれ授与されました。

平野総長は、修了生及び卒業生に対し、それぞれ送別のことばを贈り、大きく拓かれた将来へのスタートラインに立つ修了生、卒業生を激励しました（詳しくは、総長の辞をご覧ください。）。

次に、大学院理学研究科博士課程前期課程修了生の高橋里佳さんが、修了生総代として、また、情報文化学部卒業生の加藤正浩さんが、卒業生総代として、本学への感謝の気持ちと今後の抱負等を述べました。

続いて、来賓として、名古屋大学全

学同窓会副会長の丹羽宇一郎氏（伊藤忠商事株式会社代表取締役会長）から、ご自身の仕事と人生に焦点を当てた心のこもった祝辞をいただきました。丹羽氏は、「卒業はコメンズメント（commencement）です。卒業が出発の日なのです。皆さんが継続した努力を人々のために、社会のために、国のために、是非続けてください。そうすれば必ずと素晴らしい結果がついてくるでしょう。」と述べられました（詳しくは、来賓祝辞をご覧ください。）。

卒業式終了後には、豊田講堂前に詰めかけた後輩たちから花束を贈られたり、胴上げをされたり、友人や後輩、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影をする卒業生の姿があちらこちらで見られました。

卒業式の様子は、シンポジオンホール及び豊田講堂ピロティにおいてライブ中継され、詰めかけた保護者らがスクリーンに映し出される映像を熱心に見つめていました。

なお、卒業式の模様は、現在、本学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/index1s.html>）でも視聴することができます。



総長の辞（平成16年度大学院修了式）

平野 眞一



名古屋大学は、本日ここに平成16年度大学院修士課程および博士課程前期課程修了者1,604名に修士学位記を、博士課程および博士課程後期課程修了者235名に博士学位記を授与いたしました。学位記を授与された皆さんに役職員を代表して心からお祝いを申し上げます。

皆さんは、社会に出られる方、または後期課程へ進学される方とそれぞれ異なる道を歩まれますが、一つの課程を修了できたという達成感と、これから始まる新しい生活への期待感に満ちた澁刺^{はつらつ}とした気持ちで、今日ここに臨んでいることと思います。それが私にも強く伝わってきます。明るく、大きく開かれた将来へのスタートラインに立たれている皆さんに、心から拍手をお送りします。

大学院を修了された皆さんは、活用できる学力を身につけ、また学問のあり方、学び方を身につけるとともに、先導的な学術研究の一翼を担い、学術の進歩に貢献してください。20世紀以降、学術・科学技術は目ざましい発展をしてきました。あなた方の努力によって、さらに一歩進歩したはずであります。将来とも発展していくであります。

とはいえ、現在、学術・科学技術が迫られている課題はいよいよ明確になってきております。20世紀は、科学技術



において特に大きな進展があり、物質的には豊かさを享受できるようになって来ました。しかし同時に、人とのインターフェース、精神的・文化的な配慮が弱かったことは否めません。21世紀にあつては、学術・科学技術は「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御して、全地球規模での安心・安全で持続可能な発展を図ることが最も重要な課題であり、私たちは、その実現に努めなければなりません。

一口に科学技術における「影」を制御し、「光」の面を進展させるといっても、それを達成するためには「人」の存在が鍵であります。自己の創造性を駆り立て「真理の探究」への強い意志と忍耐強さを持ち、俯瞰的な視野で問題を解決できる「勇気ある知識人」が必要であります。現在は残念ながら、政治、経済においても、また市民生活のなりわいにおいても、システムが崩壊してきております。物質的・経済的側面に偏ることなく、精神的・文化的側面にも充実したバランスのとれた人間性豊かな人が軸にならねばなりません。名古屋大学は、そのような人材を育てることを使命にしております。

皆さんは、それぞれの分野において、ある一つの観点から物事を深く追求して、その成果を論文に纏めてきたであります。学問が急速に深化し、分化しつつ発展している一方で、社会においては様々な輻輳^{ふくそう}した問題に直面します。どんなに状況が変化しても変わらない学問の基礎を蓄積し続け、新しいことに立ち向かわねばなりません。自分の「IDENTITY」を大切に、大学院で学んだ学問的思考方をもとに、学問に裏打ちされた自信と精神力でもって、積極的に勇気を持って問題解決に立ち向かってもらいたいと希望します。名古屋大学で学んだことに、また精一杯努力して今日を迎えたことに自信を持ってもらいたい。今後とも、絶えず学ぶことを忘れずに、前向きに精一杯生きてもらいたい。

押し付けようとはしませんが、私が好きな、良く知られ

ているサムエル・ウルマンの「青春」について詠った詩の一節を贈りたいとおもいます。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

この詩は、理想を失うときに初めて老いが来、情熱を失うときに、精神もしぼむことを警告しております。明日に対して胸躍らせ、己を高めていきましょう。

本日学位記を授与された皆さんの中で、215名の方が留学生であります。この方々は、国を離れ、言葉や文化が異なる我が国で、将来の自国への貢献、世界への貢献を志して困難な環境の中で努力して、本日の栄えある日を迎えられました。本学では、毎年約1,200名の留学生が学んでおられます。キャンパスは、小さな地球でもあります。教室で、また研究室で、色々な形で交流がなされていたと思います。地球上の資源が有限であるという観点からすれば、また地球規模での環境対策から見ても、一国でことが成就する状況ではありません。グローバル化していく世界の中で、各国は主権を大切に、お互いがしのぎを削りながら、かつ地球規模的な問題については協調して問題を解決していかねばなりません。そのためには、それぞれの国の歴史、文化、宗教を尊重しあうことが前提でありますし、加えて、常日頃の学習に裏打ちされた自信と客観的な判断力を身につけなければなりません。多様性を尊重し、新たな秩序ある社会関係を構築していく必要があります。

そのためにも、どの分野に進もうと国際的な感覚を常に磨いておいてもらいたい。国内外の学生が一つのキャンパスで過ごし、互いの文化や考え方を理解できたことは、皆さんの将来における重要な財産です。この財産を大切に、世界に羽ばたいていかれることを楽しみにしております。

今からの社会は、若くて活力ある皆さんが築いていていただきたい。新しい世界を創るのは皆さんです。責任感ある若い方が目立って良い社会にすべきでありましょう。

そのような社会をリードするには、実務能力に加えて、人間性の観点から「選ばれた人」が必要であります。また、「選ばれた人」には、責任と義務が生じます。皆さんには、人間を信じ、愛する能力を養って、それぞれの分野で、社会をリードするという志を持ってもらいたい。名古屋大学の卒業生には、漢字の「実」の字、例えば「実直」「実行力」「実力」が良く当てはまる、と良い評価を頂いておりますが、一方、「積極さ」に弱いとも評されます。良い点は大切に、大いに伸ばし、しかし驕ることなく、勇気を持って、行動してください。

最後に、もう一度皆さんに呼びかけたい。

「夢と高い志を持ちましょう。その実現に向かって進みましょう。」

若いときは、自分の夢に自信が持てないかもしれないし、また不安でありましょう。それは、可能性が秘められていることへの証でもあります。精一杯、自分が自分に真摯に対峙すれば、夢が現実のものになります。安全・安心で、持続可能な社会の構築に向けて進んでください。

皆さんの将来の活躍を心から期待し、大学院修了生への辞とします。



総長の辞（平成16年度学部卒業式）

平野 眞一



皆さん、ご卒業おめでとうございます。

名古屋大学は、本日ここに平成16年度の学部卒業生2,154名に、学士の学位記を授与いたしました。皆さんに本学の役職員を代表して、心より、洋々たる将来に向けての船出をお祝いいたします。大学での勉学を糧に希望に満ちて新しく旅立ちされる皆さんをお送りすることは私どもにとって誇りであり、同時に喜びでもあります。皆さんの大学卒業という達成感と、これから始まる新しい生活への期待感に満ちた澀刺とした気持ちが私にも強く伝わってまいります。明るく、大きく拓かれた将来への出発点に立られている皆さんに拍手をお送りします。

皆さんは、卒業式を迎えるにあたって、名古屋大学に入学したときの心意気や、また在学中の出来事を思い出していたことでしょうか。名古屋大学での学生生活は、充実したものでありましたか。若き日のこの貴重な時に多くのことを学ばれたことでしょうか。在学中に学んだ「学問」と「友人」は皆さんの財産です。大切にしてください。

皆さんの中の約半数が大学院へ進学され、また就職するか独自の道を進む方が半数おられます。大学院へ進学する方も数年後は社会に出て活躍されることとなります。

皆さんの将来に期待して、激励の言葉を贈りたいと思います。

21世紀に入って考えてみますと、人間社会が迫られている課題はいよいよ明確になってきていると思います。急速に発展してきた科学技術は、人間の福利という点では「光」をともしている訳ではありますが、同時に、一方では生命を脅かすような「影」をももたらしていることは事実であります。私たちは、学術・科学技術が飛躍的に進歩し、その成果を享受することによって豊かになった物質文明期である20世紀を過ごしてきました。それ以前の生活にはもう戻れないような蜜をなめてしまっております。しかし、一方では、同時に派生した歪みが様々な形で顕在化しています。わが国が戦後復興のために、西洋技術のキャッチアップを

目指して生産性を重視して来たことを非難、否定するつもりはありませんが、人間性あるいはそれを実現しうる健全な社会の構築に向けた配慮が薄かったようにも思います。21世紀を生きる私達は、この「光」の面を進展させ、さらに、「影」の面を制御して、全地球規模で持続可能な発展を図ることが責務であります。特に、若くて活力ある皆さんへの期待は大変大きいものであります。

また、わが国では、政治、経済を含めた各種のシステムの崩壊が起きております。しかし、日本がこのまま没落していくとは思いません。なぜならば、皆さんのような期待される多くの若者がいるからです。若い皆さん方が、目立って良い、活力ある社会を再構築しなければ、建て直しは容易ではありません。これからは、世界の中で誇りを持って、かつ世界と共生していかなばなりません。

そのために、皆さんが社会人になり、グローバル社会の中で生きていくための世界観を身につけられることを希望します。そのために、常に、世界で起きていることを敏感に捉えて、世界の動きを、勇気をもって注視してもらいたい。特に、その国の文化、歴史を尊重して、お互いの立場を理解しあってもらいたいと思います。一方では国のエゴがぶつかる事もあるでしょうが、当然、我が国だけ単独で存続できることはないわけであり、皆さんには、異文化を理解しあい、対等な立場で互いを尊重しあって共存する世界観を持ってもらいたいし、そのための意見交換の道具（コミュニケーションツール）としての語学力を身につけてもらいたい。

国際社会で相互交流するためには、同時に、自分の国の文化を学んで接すること、自分が寄って立つ基盤を大切に、すなわち自分の存在意義「IDENTITY」を確立してもらいたい。

社会は様々な異なる文化、異なる宗教、異なる価値観を持つものが共同、協調して構成するものであります。多様性を尊重するとともに、かけがえのない自分であること、

存在感のある個人であることが尊ばれる社会となるように皆で努力しなければなりません。人の痛みが分かる、相手の立場で物事を考えるように努められることを希望します。皆さんが活躍する21世紀は、「知」の世紀であります。大学で学んだ知識が単なる技術的な手段ではなく知恵として生かせる、人間の豊かさを大切に、働きがいのある国にしなければなりません。

名古屋大学の卒業生は、併せて、この地方には、漢字の「実」の字がよく当てはまる、と言われます。「実直」「実行力」「実力」など誉め言葉を頂いておりますが、一方では「組織をリードする覇気が弱い」とも言われております。高く評価されている点は真摯に受けとめて、驕ることなく、しかしその長を大切に、そして直すところは努力して直してもらいたい。

大学院に進学される皆さんにおいては、学術・科学技術をさらに学び、将来の高度な研究者、実務者としての素養を身につけるとともに、自信をもって将来活躍できる素地を造るよう努めてもらいたい。ここでもう一度、大学院に進学する志を確かめ、自分が置かれている立場を理解して、大学院の進学に備えてください。環境がどんなに変化しても変わることのない学問の基礎を身につけ、物事を



俯瞰的に見ることができる力を自分のものにする心構えを持ってもらいたい。

また、就職される皆さんにおいては、自分の足元をしっかり見つめて、自分自身に精一杯投資して、周りから必要とされる人間、組織から「貴方がいないと困る」と言われる人となられることを期待しております。皆さんは、大学では、それぞれの分野でかなりの知識を身につけて卒業を迎えたことと思います。しかし、今後、社会で出会う問題を適切に解決して行くために、常に勉強し続けてもらいたいと思います。さらにこれまで学んでいない分野の知識を勉強しなければなりません。このような時には、大学で学んだ学問の仕方が役に立つと思います。また、皆さんの引き出しに入っている知識を融合し、活用してください。ある意味では、学生の気持ちを今後とも失うことなく、自分に投資し続けてください。自分への投資は、環境の変化があっても失われることはありませんし、越えなければならぬ壁にぶつかった時ほど、大きな力を発揮するものです。

将来を担うのはあなた方です。皆さんが高い志を持って、胸を張り、将来の日本、世界のために頑張ってくれることを期待しております。それぞれの道で、最善を尽くし、活力のある社会を創るために自信をもって活動されることを希望しております。

以上をもって、卒業生への辞といたします。本日はおめでとうございます。

来賓祝辞

名古屋大学全学同窓会副会長
伊藤忠商事株式会社代表取締役会長

丹羽宇一郎



皆さん、卒業おめでとうございます。今まで物心両面におきまして皆さま方を支えていただいたご家族、教員の方、職員の方々と一緒に、皆さんに心よりおめでとうを申し上げたいと思います。

考えてみますと、私も名古屋大学を卒業いたしましたから、もう四十数年がたちました。ちょうど豊田講堂が完成して2、3年目に、ここで卒業式をやっていたわけです。そのことはほとんど覚えておりませんが、ここで学んだ幾多のことが未だに私の現在の礎になっているのではないかと思う点があります。本日はこの四十数年間を思い出しながら、皆さんにはなむけの言葉を申し上げたいと思います。これまでの私の仕事と人生の中において経験した幾多のことで、出来なかったこと、出来ることがありましたが、皆さんに参考になればと思ってお話をいたします。

最初に内外の情勢等一般的なことをお話すべきかもしれませんが、皆さんすでにご存知のところでありますので、それはすべて省略し、もっと仕事と人生という極めて個人的な面に焦点を当て、皆さんのこれからの人生に参考になるようにお話をしたいと思います。

まず皆さんは今まで名古屋大学という極めて世界的に見れば小さな箱の中で、非常にカンファタブル(comfortable)な生活をされたのではないかと思います。この箱の中から外に出るという面では、旅行するとか、あるいは対外的な多少の接触はあるでしょうが、海外で生活をするとか、あるいは中部地区以外で生活をするというような経験はほとんど持っておられないのではないかと思います。私の経験から言いましても、二十数年、この名古屋で当時は生活していたわけでありましたが、卒業後すぐ東京に出て、それからしばらくしてニューヨークに10年、それからまた東京というふうで名古屋にはほとんど帰ってきておりません。その過程でやはり自分自身もこの中部地区あるいは名古屋という非常に暖かい箱の中で、恵まれた環境の中で育ってい

たわけであります。皆さんもまた、ほとんど私と同じような学生生活あるいは過去の20年近くを過ごしてこられただろうと思います。

そこで私が強く感じたのは、学生時代は試験というものが、試験で優秀であるか優秀でないか、優か良か可かの結果が出ました。しかしながら卒業後はほとんどありません。皆さんが勉強しなくても誰も文句を言ってくれません。つまり皆さんはこれからは今までと違って、試験があるから勉強する、それを誰かが評価してくれる、そういうことがなくなるということです。今まで勉強しなければ落第をするか可がつかますが、これからは明確な評価はいつも出ません。そして皆さんが遊びたければ遊んでよるしい。勉強しなくても誰も勉強しなさいとは言ってくれない。仕事ももっとこういうふうにしなさいとも言ってくれない、という世界が待っております。それがまず第1です。あとは皆さん、ご自身でどうするんだということを考えてください。これはまさにコメンズメント・デイ(commencement day)であります。卒業ではなく出発の日です。今までの箱の中から箱の外へ出る。厳しいという言葉ではなくて、それが皆さんのこれからの生き方につながってくるわけであります。

アメリカにもいろいろな言葉がありますが、シェープ・アップ・オア・ゲット・アウト(shape up or get out)という言葉があります。仕事をして結果を出す、でなければ去りなさいということであります。学者の世界におきましてもパブリッシュ・オア・ペリッシュ(publish or perish)という言葉があります。研究結果を発表しなさい。発表を継続してできなければ消え去るのみであります。つまり結果がすべてだということです。

結果を求める場合、一直線に結果を求められることは、ほとんど不可能であります。たとえばイチロー選手のようになりたくてもすぐ結果は出ません。今注目を集めているライブドアの堀江さんがやっておられるように、結果を求

めてすぐ手に入るかということ、多分難しいでしょう。つまりその過程が大事であります。結果を得るために、イチロー選手が、堀江さんが、あるいはソフトバンクの孫さんがどれだけの努力をしておられるか、これが結果になってこれから出てくると思います。そういった努力というものが、これから皆さんには大変に大事だということを申し上げておきたいと思います。

結果を取りにいつてはいけない。結果は日々の努力から自然に必ずついてくるとというのが、私の四十数年間の人生の結論であります。たとえば私は社長になりました。しかし、社長を取りにいけるかということ、多分不可能です。皆さんはこういう人生を歩みたい、こういうふうになりたいと考えておられると思いますが、結果はすぐには手に入らない。その過程において、ほとんどの方が努力をやめる可能性があります。しかし、その努力の継続が素晴らしい結果を生むと思います。

私の会社にも毎年、全国からたくさんの応募があります。ほとんど100人に1人の割合で入社されます。その中で我々が見るのは、試験の結果ではありません。最低レベルは見ますが、それ以上に大事なことは人間として立派か、常識のある判断ができるか、自分の価値観を持っているか、良識を持っているか、というのが全ての決め手であります。官庁に就職される方、民間の企業に就職される方、大学院に進学される方など皆さんいろいろな分野に進まれると思いますが、共通して言えることは、まず最初に知識とか技術以上に人間性、高い品性、高い教養、良識、常識というものをいかに育てるかということに努力をしていただきたいと思います。あとは結果がついてきます。

よく私の会社の中でも、人よりも一時的に評価が下がると、これでほとんど努力を止められる方がおられます。彼は運がいいだけだと、そういうことで横を向く方もおられます。私が今日、はなむけとして皆さんに、私が感じていることを申し上げれば、継続した努力であります。これは極めて難しくほとんどの方ができません。たとえば今日、こういうことを申し上げたい。1日30分読書をしなさい。多分、今日は出来るでしょう。明日になると、昨日は酒を飲みすぎた、今日は眠い、友だちとの約束があるなどの事情が出てきます。2日目も、出来るかもしれない。しかし、毎日出来るでしょうか。多分1年後、私の今日の言葉を思い出して、出来たと思う方は素晴らしい。間違いなく一つの方で成功するでしょう。私どもの会社でも100人のうち、多分5人はいない。それがすべての決め手になるといふふうに思います。

約60年前に上野の美術学校の学長がこうおっしゃいました。ほとんどの方は瓦礫の中から出てきた原石である。皆

さんは瓦礫ではない。原石である。この中から一粒の宝石しか出ないとおっしゃったわけでありまして。企業の社会においては一粒ではない。しかしながら非常に限られた、宝石とは言いませんが、輝きを持った石になる可能性のある方が数人は必ず出るでしょう。しかしその原石を磨いて輝きをもたらすのは、日々の努力であります。決してあきらめない。そしてたとえば1ヶ月、1年、努力をしたときに、そこでなかなか結果が出ないということであきらめれば、永遠に輝きを失うでしょう。

ところが、そこで踏みとどまって努力をするかしないか、これが分かれ目です。皆さんは同じような能力を持っておられます。私が四十数年間見た中でほとんどの人は同じような能力を持っています。学校の成績の優良可は、ほとんど関係ありません。皆さんはそれだけの努力をしたかどうかです。能力は皆さんにある。ある日、ある時にDNAのランプが点くのです。能力がジャンプアップすることがあるのです。王貞治さんもそうでした。あるいはスポーツをやっている方はそういう自覚をお持ちになるでしょう。それは努力の結果、ランプが点くのです。自分の能力のDNAにランプが点くことがあります。しかしそれはいつ点くか分からない。10年後かもしれない、15年後かもしれない。もしかすると明日かも知れない。しかし、努力をやめれば永遠に点かないのです。そこに皆さんの人生の大きな分かれ目があるということです。

従って、継続した努力、1日も休まない努力を続けられるかどうか、これが皆さんの人生の全てを決めるでしょう。今日からスタートしてください。卒業はコメンセメント(commencement)です。卒業が出発の日なのです。そして皆さんがその努力を人々のために、社会のために、国のために、是非続けていただきたい。そうすれば結果は自ずとついてくるでしょう。それを信じて努力をしていただくように、はなむけの言葉としてお贈りしたいと思います。どうも本日はおめでとございます。

(祝辞は、大学院修了式と学部卒業式のそれぞれに頂戴しましたが、学部卒業式に頂戴した祝辞を掲載させていただきました。)

シンポジウム 名古屋発「グローバル時代の大学交流」開催



パネルディスカッションの様子

シンポジウム『名古屋発「グローバル時代の大学交流」～“人づくり”の現場から～』が、3月11日（金）野依記念学術交流館において、毎日新聞社との共催（愛知大学後援）で開催されました。

シンポジウムでは、初めに、平野総長から、参加者、講演者及び協賛の関係機関に対する謝辞と本学の国際活動の状況等を含めたあいさつがあった後、渡辺毎日新聞中部代表からあいさつと、大学交流は受け皿づくりが重要であること等についての話がありました。

第1部では、中国からの第1期国費留学生として本学工学研究科に在籍した経験がある赫冀成中国東北大学学長の基調講演が行われました。赫学長は、中国と日本との交流の歴史を通して、私見としながら、「架け橋にはエリートの役割が大きい」とし、優秀な人材を育てることの重要性和質の高い留学生の必要性について述べました。

休憩後、中部大学院生のゾン・ティン・ティンさんの中国琵琶の演奏があり、会場は華やいだ雰囲気となりました。

第2部のパネルディスカッションでは、最初に、4名のパネリストがそれぞれテーマに応じた話をしました。山本副総長は、本学の国際化の現状と10年で留学生数が倍増と



中国琵琶を演奏するゾン・ティン・ティンさん

なった各種の要因を述べました。また、評価事業で高く評価されたことや上海事務所を設置のこと、さらに、保育所の設置では外国人研究者、留学生の利用も検討されており、大学のキャンパスそのものが国際交流の絶好の場所であると話しました。

武田信照愛知大学学長は、愛知大学は設立以来中国との関係が深く、学生を毎年数百名派遣していることや中国の現地調査を行っていること、今後は国際交流から国際連携へ向けた共同事業を行う必要があることを話しました。

松原彰雄トヨタ自動車㈱専務は、企業は変化に対応し成長できる人、多様性の中でリーダーシップがとれる人を求めていること、また、OJT やチャンスを与えることが人材育成のためには重要であり、トヨタ自動車では、2～3年目の社員に対し、海外派遣制度を実施していることを話しました。

中部大学院生のゾン・ティン・ティンさんは、自立の気持ちや夢を持って留学し、新しい世界に挑戦したことが自信になったこと、ささやかな交流が嬉しく感じられるものであること、奨学金の充実等が必要であることを話しました。

次いで、各パネリストが質的向上という観点から話をし、山本副総長から、送り出し側と受け入れ側で様々な問題があり検討を要すること、武田学長からは、経済的な援助が必要であること、良き師・良き友が必要であること、また、松原専務からは、元気な人、型破りな人、人付き合いが重要であること等の意見が出されました。

会場からは、様々な世代の国際交流が元気な高齢社会のために重要ではないか、留学が自分探しの機会になる等の発言がありました。

最後に、山本副総長がフルブライトの言葉を引用し、シンポジウムを締め括りました。

忙中閑あり？

総長
平野 眞一

総長は24時間勤務と言われており、閑ありとはありえないが、少しは気分転換がしたい。数年前に学会の仲間から半ば強制的に誘われた“棒振り”は、仲間同士の気安さと、同じ代金で友人より多く棒を振ることが出来る楽しさを味わいだしたところで、棒の類は車のトランクから消えている。大学で急用があっても、家ならば連絡も着きやすいであろうと、家に居ながらの空を駆け巡る世界一周を楽しんでいる。

これまでもいろいろな趣味を持ってきたが、高校生の時に免許を取ったアマチュア無線（ハム）だけは、40年以上続いている。送信機や受信機を組み立てるために、電気回路を書き上げ、東京の秋葉原へ米軍の放出部品を夜行電車で買いに行ったことも懐かしい。私の電波が弱く聞き取りにくかったために、出力を上げる資金として400ドル（当時は1ドル360円、学卒の初任給は1万円ほどであったと思う）の小切手を送ってくれたカリフォルニアに住む現在90歳を過ぎている友人は、今でも私のアメリカの父のような存在である。

学生時代に創ったアマチュア無線クラブは、現在も北部食堂の横で、アンテナをあげて活動して

いてくれる。昨年の2月には「総長になると特定のクラブの顧問はできない」と伝えて長年務めた顧問を退任した。3月末に、クラブ員がそろって工学研究科長室に来室してくれ、コールサインを刻印したサインペンを記念に戴いた。彼らの温かい心遣いに、感激した。

地球上の交信可能な地域や周波数は、ほぼ11年周期で変わる太陽の活動に伴う電離層の状態に強く影響されるので、指標となる黒点数によって、また季節や一日の時間帯によっても異なっている。もしも一日中無線機のスイッチを入れていれば（そのようなことは、現在はありえないが）、居ながらにして世界一周が出来る。インターネットが常用されている今、電離層の壮大な動きにつれて空を旅する電波に乗って、見も知らずの相手と遭遇するという偶然性、未知のものを追いかけるというロマンを楽しんでいる。中には研究・教育に携わっている人も結構多く、仕事を離れてもいいながら、また教育や研究の話をしてしまうという、あきれた性分に気づくときも多い。



- | | | |
|---|---|--------------------|
| 1 | 2 | 1 自宅の無線室にて |
| | | 2 コールサインを刻印したサインペン |

生物学的に重要な天然有機化合物の探索研究

- 生物現象に学ぶ天然物化学 -

上村 大輔 大学院理学研究科教授 / 高等研究院流動教員

天然物化学における新物質発見は医薬等として私たちの生活と密接に関わると同時に、新しい自然科学分野の発展に大きく貢献してきました。例えば、フグ毒テトロドトキシンは神経生理学の、矢毒成分パリトキシンは細胞内のナトリウムイオンまたはカリウムイオン濃度調節の生理学の進展に大きく寄与し、また海洋動物由来のオカガ酸は生体内のリン酸化機構の解明に繋がりました。このように天然有機化合物の構造や機能には、時として想像をはるかに超える斬新さがあり、しばしば目を見張るような思いをさせられます。私たちの身の回りには不可思議な生物現象がたくさんあります。生物のいとなみには必ず化学物質が大切な役目を担っていますが、含量が非常に少なかったり、外に取り出すとすぐ壊れてしまったりして、その正体が明かされていないものが未だ数多く残されています。これらの問題の解決には天然物化学のみならず、分子生物学や機器分析学の最先端の技術とその結集が欠かせません。近年のこれらの分野の著しい進歩と相俟って、今、天然物化学者は未解明生物現象を司る“鍵”化学物質の研究に力を入れています。鍵化学物質は従来にならぬ生命現象解明の糸口となり、全く新しい科学が発展していくと期待されます。以下、私たちの研究室での取り組みを御紹介します。

トガリネズミの唾液麻酔物質：トガリネズミは自分より大きなミミズや昆虫に噛みついて麻酔をかけ、巣穴に貯蔵することが知られていますが、麻酔成分の解明には至っていませんでした。特に作用が強力な北米産ブラリナトガリネズミの顎下腺抽出物から活性本体ブラリナトキシンの分離・精

製に成功し、これが単一のタンパク質であることが確認できましたので、遺伝子クローニング手法により cDNA の全塩基配列を決定してそのタンパク質の構造を解明しました。これは天然物化学と分子生物学が融合した手法が十分に働いた例となる研究成果です。哺乳類由来の最初の毒でもあり、その機能に興味を持たれます。毒を持つもう一つの哺乳類であるカモノハシについても検討を開始しています。



図1：北米に生息するブラリナトガリネズミ
Blarina brevicauda (強力なタンパク毒を持つ)

サンゴを侵食するカイメン由来の細胞毒性物質：徳之島や沖縄県でサンゴの表面に被覆状に見られるある種のカイメンは、よく観察すると、死んだサンゴに付着して成長する藻類とは異なり、活きたサンゴを殺しながら成長しているようでした。この成分を調べたところ、微量成分の一つが強力な細胞毒性を示すことが判りました。得られた量は僅かでしたが、最新の核磁気共鳴 (NMR) スペクトル測定法を駆使して化学構造決定に成功

しました。この新規化合物の生合成経路や生態系での役割に興味もたれます。生態系で見られる動的な化学物質のやり取りは“ケミカルコミュニケーション”ともよばれ、被覆侵食関係の他、共生・寄生物とその宿主との関係、着生や変態と環境因子との関係など興味深いシステムが数多く存在します。このような生物現象に着目した化学的研究の成果は生態系の保全にも繋がります。例えば、サンゴの着生や変態を誘起する物質の解明はサンゴの生活環の化学的理解を深め、サンゴとその共生藻とのケミカルコミュニケーションの解明は共生藻離脱によるサンゴの白化現象を食い止める可能性をもたらします。これらの現象についても検討を進めています。



図2：サンゴを侵食する黒色カイメン（黒色カイメンの出す毒物によって白化した部分が観察される：沖縄県今帰仁村にて）

化学物質の生物種間移動：食中毒で有名なフグ毒は、微生物が生産し、食物連鎖を経てフグに蓄積されることが判っています。このように化合物が生物種間を移動する過程では化学修飾を受けると考えられます。例えばホスホリパーゼ A₂ 阻害物質ピンナ酸と血管内皮細胞接着分子産生阻害物質

ハリクロリンは各々沖縄産二枚貝と伊豆産カイメンから見出された海洋性アルカロイドですが、単離された動物種がかけ離れているにも関わらず極めて類似した構造をしています。同様な関係は二枚貝タイラギの食物毒であるピンナトキシン A と、別の二枚貝に見られるプテリアトキシン A でも見られます。これら生物種間移動と化学修飾との関係に焦点を当てた研究は少なく、未解明の分野として注目しています。手始めとして海洋性微細藻類が生産する生物活性物質の単離・構造解明を開始しており、ヒラムシから分離した微細藻類由来の破骨細胞分化抑制物質シンピオイミンを発見しました。宿主から得られる物質との関連性、共生関係における役割などの検討を計画しています。

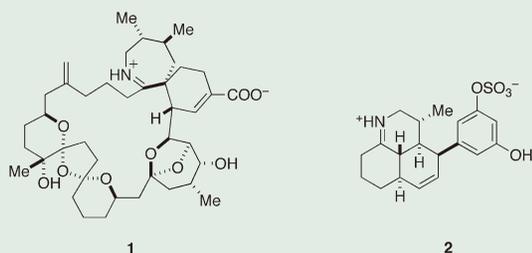


図3：タイラギ食中毒原因物質ピンナトキシン A (1) と微細藻類由来の破骨細胞分化抑制物質シンピオイミン (2) (骨粗鬆症治療薬として期待されている)

1968年名古屋大学理学部化学科卒業。1973年名古屋大学大学院理学研究科化学専攻博士課程単位取得満期退学。理学博士（名古屋大学）。名古屋大学理学部助手、静岡大学教養部助教授、静岡大学理学部教授を経て、1997年より名古屋大学大学院理学研究科教授。2004年より名古屋大学高等研究院流動教員（併任）。2004年より日本学術振興会学術創成研究費「生態系ダイナミズムに着目した物質探索法」研究代表者。2005年より社団法人日本化学会理事。第25回天然物化学国際会議・第5回生物多様性国際会議（2006年）組織委員長。

うえむら だいすけ



西洋主導の心理学に異議を唱える

高井 次郎 大学院教育発達科学研究科助教授

心理学の最先端を走る研究は、主に西洋から発生しており、わが国の研究はこれらに追従する形を大抵とっています。すなわち、人間の心理・行動の特徴は、人類に普遍的であり、人種や文化の影響は、最小限であるという仮定のもとで、研究の多くが実施されています。「生得」対「習得」の議論は古くから行われておりますが、少なくとも研究の状況からみると、前者を支持する研究者が圧倒的多数に思われます。ただ、西洋の学者が、西洋の人びとをもとに観察した行動を、西洋的な判断基準で概念化して行動予測の理論的モデルを提唱したとしても、果たしてそれが東洋人や日本人にあてはまるのでしょうか。

一概に、西洋心理学の研究のアプローチは、人間を自立した個人として認識しており、研究の焦点は個人に当てて、その人がおかれている社会的文脈や周囲の人間関係を考慮に入れないのが普通です。こうした「個人主義」の文化で生まれた研究パラダイムは、「要素還元主義」(reductionism)にもとづきます。要素還元主義は、個人の心理的特徴は相手や状況とは無関係に、常に一定であり、その個人の「特性」を成すと仮定しております。一方、日本人の対人行動を考えると、相手との親密性や地位の格差など、関係性の要因の他、状況の公式性など状況の要因によって、どのような行動が適切なのかが大幅に異なるため、「状況」を規定要因として扱うべきです。この特性論対状況論は古くから心理学では議論されておりますが、未だに前者が優勢である様子が多々うかがえます。

この要素還元主義の特性論的偏重が、比較文化心理学の研究にアノマリーを生んでいます。特に、

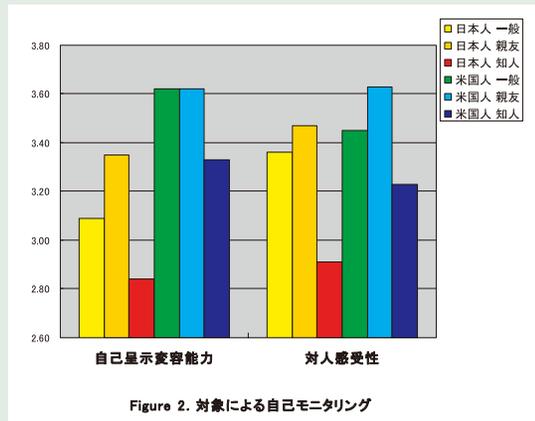
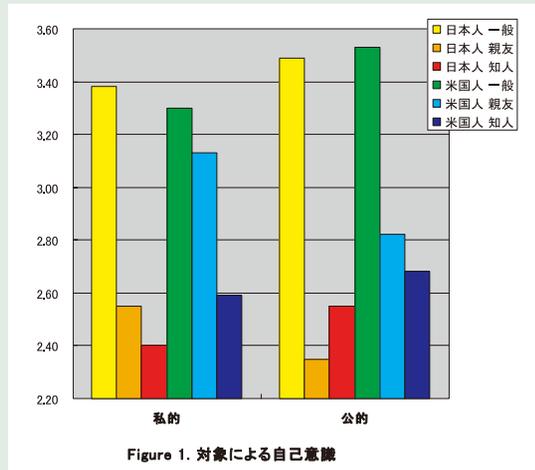
日米比較に焦点をあてますと、個人主義的とされるアメリカ人に比べて、集団主義のはずの日本人が、より個人中心な行動を見せている場合が多く、著者たちは予想外の結果を、日本の国際化・個人主義化に起因したり、被験者が学生であったことを言い訳としています。しかし、研究方法に問題があるとの見解が示されておられません。

なぜ「日本人らしさ」が抽出されないのか、研究方法に実に簡単な工夫をして、「自己観」の日米比較を行ってみました。西洋的な自己の認識によると、常に安定した自己をもち、状況や相手に一貫した自己こそが信頼できる、望ましい人の特徴です。そのため、自己観を測定する心理的尺度は、こうした状況や関係性を考慮せずに、「グローバルな自己」の評定を求めます。しかし「日本的自己」は、TPOや相手に応じて合わせるものが強いられるので、さまざまな「自己モード」が必要です。そのため、「自己」を呼称する単語が、英語のIとmeのみに対して、日本語では「私」「俺」「僕」「小生」「自分」など、その状況に応じて特定の自己になりすませる道具を与えてくれています。

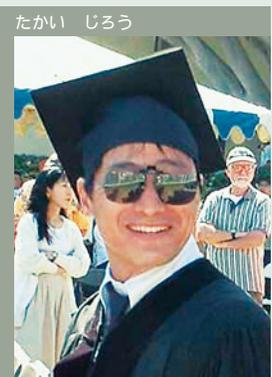
そこで、関係性にまず着目して、相手との親密性を変数として自己観の評定を日米で求めました。グローバルな自己、親友に対する自己、顔見知り程度の知人の3標的に対して、自己意識と自己モニタリングを、日米の被験者に自己評定させた結果です。自己意識は、自分に忠実であるべきと考える「私的自己意識」(=private)と、相手に気に入ってもらうため自己調整を行うべきと考える「公的自己意識」(=public)からなり、自己モニタリングは、相手に応じて自分のあり方を変

える「自己呈示変容能力」(self-present)と、相手の様子の変化に敏感である「他者への感受性」(=sensitivity)から構成されています。Figure 1とFigure 2から明らかのように、関係性間と、各関係性とグローバルの評定間の違いが、日本人のほうがアメリカ人よりも大きいことがわかります。このことは、アメリカ人は日本人と比較すれば、より一貫した自己観をもつことを意味し、状況・関係性の要因を変数として考慮する必要性が、それほどないということです。

最近行っている研究では、対人コミュニケーション行動に焦点を移し、関係性と状況の影響を、日本、アメリカ、カナダおよび台湾で比較検討しています。東洋人や日本人の対人行動を研究するには、個人だけに注目してはならない理由を、今後海外へアピールしたいと考えております。



- 1986年 国際基督教大学教養学部卒業
 - 1988年 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程終了
 - 1990年 名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程中退
 - 2002年 カリフォルニア大学大学院修了、PhD取得
 - 1990年 広島大学大学教育研究センター助手
 - 1991年 名古屋市立大学教養部講師
 - 1994年 名古屋市立大学教養部助教授
 - 1996年 名古屋市立大学人文社会学部助教授
 - 2000年 南山大学外国語学部助教授
 - 2002年 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授
- 専門領域は社会・文化心理学。研究テーマは「日本的対人コンピテンス・モデルの構築」



トヨタ車体（株） 総務部広報室パリダカ推進グループ
沼田 靖志

パリダカでの優勝を車づくりに生かす



30歳・入社5年目という節目の年に、車好きにとっては願ってもないパリダカ社員ナビ募集というチャンスが訪れました。もともと車が好きな上、何か新しい事に挑戦し、エンジニアとしての自分を成長させたいと思い立ったのが応募のきっかけ。面接とドライビングテクニックテストを受け合格、モロッコでのテストなど約8か月の訓練期間を経て、今年1月1日、スペインのバルセロナをスタートしたパリダカに初参戦。スペイン・モロッコ・モーリタニア・マリ・セネガルの5か国約1万キロを16日間毎日毎日走り続けました。各国の気候の違いから次々と変わる路面状況や、国内ラリーとのスケールの違い、フランス人を主体としたチームでの意思疎通、実績のない者は認めないという雰囲気戸惑いつつも、あらゆる路面で早く走ることのできる車と究極の危機管理能力が求められ、やりがい十分。アフリカではJAFを呼んでも来ませんし、水が無くなってもコンビニもない。簡単には誰も助けてくれません。

TLC (Team Land Cruiser TOYOTA AUTO BODY) は市販車無改造クラスにランクルで参戦

しており、パリダカでの経験が今後の市販車開発に直接結び付きます。社員ナビゲーターとして会社に色々な経験をさせてもらっている以上、TLCの一員としてパリダカで勝ち続けることもさることながら、開発部門と連携し、ラリーでの不具合を検証するなど、皆でモチベーションを高め、より良い市販車づくりにフィードバックしていきたいと考えています。究極の車両評価の場であるパリダカでの経験を、エンジニアとしてのより良い車づくりに生かすことができた時、初めて夢がかなったと実感することができると信じ、走り続けます。

ナビの仕事： 方向指示：主催者側から渡されるロードブックに従い、GPSなどを駆使して走行ルートを指示する 路面指示：危険な箇所をドライバーに伝える 時間・燃料搭載量管理
テレフォニカ・ダカール：ヨーロッパをスタートし、アフリカ大陸を縦断。3週間約1万kmを毎日毎日走る



1
|
2

- 1 ダカールにて市販車無改造クラス優勝に歓喜する筆者の沼田ナビゲーター（左）と浅賀ドライバー（右）
- 2 西サハラ砂丘を果敢にせめるランドクルーザー

ぬまた やすし

1974年7月17日、安城市生まれ。99年工学部機械工学科卒業。学生時代は自動車部に所属。99年トヨタ車体入社。車両実験部CAE室にて衝突安全性能についてCAEを用いて構造解析し、より良い車両構造を提案、NOAH・VOXY・世界戦略車IMVなどの開発に携わる。昨年4月の社員ナビに応募し合格。総務部広報室パリダカ推進グループに所属し、TLCのナビゲーターとして今年1月テレフォニカ・ダカールラリー2005に初参戦。市販車無改造グループで優勝（総合17位）

グリーンランド縦断を終えて

大学院環境学研究所地球環境科学専攻博士後期課程2年
長谷 徹志

極地は、厳しく美しい。だから面白い。昔から探険、冒険小説が好きで、植村直巳の本を読んで以来、いつかは自分も極地を旅してみたいと思うようになっていた。そして、3年前、オゾン層に関する研究で、北極圏に位置するスピッツベルゲン島へ行く機会に恵まれた。しかし、研究棟からあまり離れられず、数キロ先に見えるあの山の先はどうなっているのだろうか、もどかしい気持ちで一杯だった。それ以来、極地を旅してみたいという思いはいつそう強いものとなった。どうして良いのか分からなかったが、どうしても極地を旅してみたかった。そんな折り、大場満朗氏がグリーンランド内陸氷床縦断のパートナーを募集していることを知り、このチャンスを逃す手はないと思い、飛びついた。大場氏は世界で初めて北極と南極の両極を単独徒歩で横断した著名な極地冒険家だ。出発まで、装備、トレーニング、スポンサー獲得等の準備に1年かけた。当初、10人ほどいた隊員希望者も徐々にその数を減らし、結局大場氏と私の二人で縦断することとなった。我々が旅したグリーンランド内陸部は、気温-25前後、標高2500m前後の氷床上で、360度

真っ白真っ平らな世界が果てしなく続き、人も生物も存在しない場所だ。グリーンランド南端を2004年4月5日に出発し、北端まで約2500kmを食糧、装備等を積んだ110kgのソリ引き、雪と氷だけの世界を57日間かけ縦断した。さらに、大学での自身の研究を活かし、大気、雪、紫外線等の環境調査を行いながら縦断した。最初の一週間は天候不順と体調不良、環境への適応不足のため、ほとんど進めなかった。あまりに辛く、泣いて辞めさせて下さいと大場さんに頼み込んだこともあった。他にも、怪我や凍傷、大場氏との衝突、クレバスだらけの危険地帯等、色々なことがあったが、なんとか乗り切る事が出来た。とてもひとりでは乗り切れなかった。多くの方々に支えられたからこそ、今回の旅を通じ、これまでの様々な出会いに感謝せずにはおられない。現在、グリーンランドから持ち帰ったサンプルを分析中で、この調査結果を学会や論文等、様々な形で発表することを楽しみにしている。



ながたに てつじ
1977年3月9日生まれ
山口県出身

1
2

- 1 ゴール後にピックアップしてもらった飛行機の前で
(大場満朗氏(左)と筆者)
- 2 テント近くで大気の調査をする筆者

平成16年度名古屋大学総長顕彰 8名1団体表彰！



平成16年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月25日（金）の卒業式終了後、豊田講堂第1会議室において挙行され、8名の学生と1団体が表彰されました。

総長顕彰制度は、学問の研鑽や文化・社会活動等を通じて、「名古屋大学学術憲章」の目指す人材像を実践している学生を讃えるために、昨年度創設されたもので、「学修への取り組み」（学修において成果がともなう取り組みを積極的に行っており、その姿勢・成果が他者の模範となると認められる者等）と「正課外活動への取り組み」（正課外の諸活動においてすぐれた評価を受けたもの、又は本学の名譽を著しく高めたもの等）の2部門からなります。

今年度は、総長、理事等で構成する総長顕彰委員会での審査の結果、「学修への取り組み」部門で5名、「正課外活動への取り組み」部門で3名1団体が受賞しました。

受賞者のことば

「学修への取り組み」部門

King Robert James（文学部人文学科4年）

総長顕彰のために選ばれた事を嬉しく思っています。自分では価値のある勉強が出来ているかどうかは不安でしたが、このような賞で評価されたことを励みにし、これからも一所懸命に研究していきたいと思っています。先生方と研究室の皆様のおかげでここまで来られたことに感謝しています。これからもご指導を宜しくお願い致します。

〔講評〕

ほぼ完璧な日本語の語学力に加え、さらに本学入学後に身につけた中国古典文の読解能力は、中国哲学の中でも難解な『老子』の「自然」という言葉の含意を考察し、テキストとして『帛書老子』等を使うなど、その優秀さを高く評価できる。また2・3年生の授業の下調べの相談に乗るなど学内での評価や、新聞で紹介されたことによる地域との関わりから、その人となりを窺うことができる。

Alisa Chobisara（法学部法律・政治学科4年）

本年度は全く思いがけず、このような立派な賞をいただきまして、深く感動いたしております。特にこのような形でこの名譽を下さいました名古屋大学総長の平野眞一先生、総長顕彰委員会委員長の若尾祐司先生および関係者の皆様、それから、大变身に余る受賞の推薦を下さいました、私が日頃敬愛しております指導教員で法学部長の佐分晴夫先生および法学部の先生の皆様のご厚情に心から感謝を申し上げたいと思います。

〔講評〕

留学生であるがゆえの日本語の授業でのハンディを感じさせない優秀な成績を修めた。それを支える学修への積極性は、授業の演習での際の議論や、外務省と自ら交渉し留学期間延長許可を取る等に現れている。本学法学研究科の前期課程入学も決定している。また、学内外でのボランティア活動にも精力的に取り組んでおり、他の学生にも良い刺激を与えている。

松本将嘉（経済学部経済学科4年）

この度、日頃の学修への取り組みに関して顕彰いただけることを大変光栄に思います。選考委員会の皆様に厚く御礼を申し上げます。又、同時にご指導をいただいた教員、留学をはじめとする様々な機会を与えてくださり、これまで学生生活を支援して下さった大学関係者各位、並びに、共に学び良い刺激を与えてくれた友人たちにも深く感謝いたします。

〔講評〕

講義やゼミナールのみにとどまらない積極的な学修への姿勢が目立つ。経済学部生を対象とした「キタン会懸賞論文」への応募や、経済学の文献を外国語原文で読むなど自発的な努力を怠らない。「日仏間交流事業」によるフランス留学では、レポートが現地の教員から高い評価を受けたのみならず、現地の小学生に日本文化の紹介を行う等、文化交流にも貢献した。

池野 巧（工学部化学・生物工学科4年）

この度は4年間の大学生活を総長顕彰という形で評価して頂きましたことを、大変光栄に思うとともに感謝しております。また、この大学生活を支えて下さった多くの人に感謝します。現在私は、有機化学の研究室で不斉触媒の開発を目指し研究を行っています。今回の受賞をこの先の修士課程

での研究活動や社会に出て仕事をする際の大きな励みとして頑張っていきたいと思います。

[講評]

強い自覚と責任感が学修への取り組み姿勢にも現れ、実力にも繋がっている。クラスではリーダーシップを発揮し、クラス全体の学修向上に貢献した。また、日本化学会春季年会で口頭発表する卒業研究は、学修の優秀さだけではない、真摯な姿勢やひたむきな努力と研究者としての高い潜在的な能力を示すものであり、その成果は高く評価できる。

内藤隆人（農学部応用生物科学科4年）

正直、自分が選ばれたことに関しては、違和感があり、自分がこのような賞をもらっていいものかという不安もありますが、審査員の方々に選んでいただいた以上は、失礼の無いように堂々とこの賞を受け取らせていただきます。今回の賞は大学生活における自身の学修に取り組む態度が評価されたものですが、このことを、単にこれまでの活動に満足するだけに留まらず、これからの学習活動に対しての励みとしていきたいです。今後、私は、大学院へ進学し、現在在籍する微生物学研究室に続けて在籍する予定です。そのため、当面は研究活動に対し、今回の受賞に恥じぬよう取り組んでいこうと思います。今回のことに慢心せず、地道にコツコツと努力ができる人間になれるように精進していこうと思います。最後に、総長顕彰の学修への取り組み部門での受賞者に選ばれるにあたり、推薦して下さった方々、これまでの学習活動の際お世話になった先生方および研究活動を指導してくださっている水野教授に感謝します。

[講評]

食料・環境問題に関心を持ち、この問題に取り組むための十分な教養、論理的思考力を身につけたいという高い志がある。農学系科目を幅広く履修し優秀な成績を修め、意欲をもって研究に臨んでいる。研究室では実験装置の考案、実験プロトコルの改良・編集など、他の学生への貢献度も高く、模範となっている。

「正課外活動への取り組み」部門

就活サポーター 代表：今永典秀

（経済学部経済学科4年）

「3年目にして、初受賞……」

先輩の活動や今期スタッフ45名、そして、陰からの協力の方々の「想い」の結晶が受賞へと導いたと思います。あくまでも、相談者が主役で行われた就活サポーター。今後も総長顕彰受賞をきっかけに、ますます発展して、やがて名古屋大学の目玉となることを、陰から見守りたいと思います。私自身も、サポーターとの出会い、自らの成長……本当にいい経験ができました。

[講評]

就職活動を終えた学生、OB、OGと就職活動生との繋がりを築くさまざまな活動を、就職支援室や就職相談室と共に積極的に行った。また、この活動を本学に根付かせようという意欲があり、本学への貢献は多大である。

山口博史

（大学院環境学研究科社会環境工学専攻 DC 1年）

この度は留学生会館をベースにした活動に対して総長顕彰をいただき、ありがとうございました。これまで私たちが関わった様々な方々から、活動の着想や内容などについて多くのことを学ばせていただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。これからも多文化社会のあり方について、学び、考え、実践する努力をしていきたいと思えます。私たちの活動については留学生会館ウェブサイト（<http://homepage3.nifty.com/igrec/>）をご覧ください。

[講評]

本学の留学生会館のチューターとしてホームページを立ち上げ、留学生の日本での生活をサポートしている。またこの経験を生かし、多文化共生を目指す地域活動や留学生のためのボランティア活動を積極的に行っている。

奥野圭太郎（農学部資源生物環境学科2年）

私は、主に農学系の懸賞論文と、農業・環境に関するボランティア活動を行っています。具体的には「第14回ヤンマー学生懸賞論文」の優秀賞に入賞、毎日新聞社主催「第16年度北海道提言賞」も優秀賞を頂きました。ボランティアでは、中越地震被災地の闘牛・錦鯉文化保護の募金活動や、愛知万博・地球市民村での通訳と翻訳業務をしています。これらの活動を、総長顕彰として評価していただきましたことを、大変光栄に存じ感謝します。

[講評]

2003年度の「ヤンマー学生懸賞論文」での優秀賞に併せ、「平成16年度北海道提言賞」の優秀賞入賞と、新潟県中越地震の募金活動や愛知万博に向けたボランティア活動など、大学で学んだことを社会に「生かす」という、積極的な「学び」の姿勢が顕著に見られる。

江原康太郎（医学部保健学科4年）

この度は素晴らしい賞を頂き大変嬉しく思います。今回の受賞は自分ひとりの力では成し得る事はできなかったのも自分を支えてくれた相撲部関係者、周りの人々には本当に感謝しています。我々相撲部はまだ歴史が浅く、構内に道場が完成したのもつい昨春のことです。しかし、実際の月日の何倍もの密度の濃い活動を行ってきたつもりなので、その活動の一部が今回この様な形で認めて頂いた事は自分にとってより大きな喜びとなっています。またこの受賞が部への更なる追い風になればと願っています。最後になりましたが、相撲にて学んだ礼儀・作法や体力の向上、そしてクラブ活動を通じての様々な人との出会いはこれからの自分にとっての大きな財産になると思います。ありがとうございました。

[講評]

放射線技師を目標とする学修と、相撲部での活動を4年間にわたって両立し、全国大会等各種大会で優秀な成績を修め、本学の名誉を高めた。

7 . 法・経本館・共用館



平成17年1月、法・経本館・共用館のリニューアル工事が完了しました。法・経本館・共用館の建物総面積は14,972㎡で、改修工事は 期に分けて実施し、南半分を平成15年6月から平成15年11月の間に、残りの北半分を平成16年7月から平成17年1月の間に行いました。

改修した建物は、約45年前、昭和33年から34年にかけて建設されたもので、本学に現存する建物の中では最も古い部類に入ります。経済学部本

館の屋上に設けられている全面ガラス張りの階段ホールが特徴的で、建設当時もスマートな印象で迎えられたことが推測されますが、45年という経年により内外とも老朽化が進み、雨漏り、外壁劣化・はく落、床仕上げ材の剥がれ、窓・扉等の不具合、配管漏れ等、多くの支障が発生していました。

リニューアルの全体計画としては、閉鎖的であった建物周辺の中庭や空地を、開放的で居心地



- 1 南棟外観（改修後）
- 2 北棟外観（改修前）
- 3 北棟外観（改修後）
- 4 北棟ガラス張り階段ホール
- 5 カンファレンスホール（改修前）
- 6 カンファレンスホール（改修後）

		1			
					4
2	2		5		6

のよい屋外空間として再生させるとともに、平成14年に完成した文系総合館との関連性を重視した人の流れをつくり出すことにより、周辺地区全体を活性化できるものとなりました。

また、建物内部においては、従来の度重なる学生数の増加等、経年の利用形態の変化によって余儀なく生じていた、動線やゾーニングの不具合の見直しを根本的に行い、院生室や共用スペースを集約する等、教育・研究の効率化に配慮しました。また、バリアフリー化にも積極的に取り組み、車椅子対応エレベーターやトイレの更新による使い勝手の改善、スロープによる段差の解消、適切な出入口幅の確保などを実現しています。

本建物は大きく3つの部分に分かれ、法学部・法学研究科が主に利用する南棟（法学部本館）は、1階に事務部門と図書室、2・3階には教員・院生の研究室を配置し、経済学部・経済学研究科が主に利用する北棟（経済学部本館）は、1階に事務部門と国際経済動態研究センター、2階に教員研究室と会議室、3階に教員研究室と院生室、4階に演習室と情報処理室を配置しました。南棟と北棟を結ぶ中央棟（法・経共用館）には、講義室・図書室の他、多様な教育・研究に流動的に利用可能なプロジェクトスペースと、収容人員では豊田講堂に次ぐ規模を持つカンファレンスホール（約500名）があり、ここでは下階にある講義室2室との映像音響システムの連携によって、最大約1000名の同時聴講を可能にしています。

また、平成14年4月には、名古屋市が東海地震に係る地震防災対策強化地域に指定されましたが、本学でも非耐震建物の耐震化改修を促進しており、今回の工事では本建物の耐震補強工事も実

施しました。耐震補強の方法は、既に本学で耐震補強工事を実施した建物で採用しているアウトフレーム（既存の構造体に補強柱・梁を密着させて新設）またはダブルウォール（既存の構造体から離して新しい補強壁を新設）によって行いました。

建物の外観は、平成14年に改修された文学部・教育学部本館や工学部2号館、IB電子情報館の新築といった一連の整備の流れを踏襲し、統一感のあるものとしていますが、東側は四谷・山手通りに面し、地下鉄1番出入口に最も近くに存在する本建物がリニューアルされたことにより、付近の景観も一新されました。名古屋大学東山キャンパスが少しずつ表情を変えていきます。

（施設管理部）



第51期留学生センター日本語研修コースが修了



第51期留学生センター日本語研修コース修了式が、3月10日（木）に行われ、41名の国費留学生に修了証書が授与されました。

同コースは、本学又は近隣の大学に配属された国費留学生のうち、研究留学生及び教員研修留学生で日本語の予備教育が必要な人を対象に、4月から9月まで又は10月から翌年3月までの6ヶ月間に、16週間の集中的な日本語教育を行うものです。

修了生のことば

WATCHAREERUET AI UKRIT（タイ）

ウクリットと申します。タイからまいりました。情報科学研究科のM1です。去年の10月から6ヶ月コースで勉強しました。このコースでいろいろなことを勉強しました。日本語だけでなく、日本文化や日本の生活についても教えてもらいました。

このコースで一番よかったのは聞く練習だと思います。最初の時はまだぜんぜん聞き取れなくて、大変でした。でも、宿題をして何回も聞かなければならなかったのが、聞くのは良くなりました。聞く練習のほかは発表です。発表するときは習った文法と言葉をじっさいに使って、文を作る練習になりました。教科書からの会話も役に立つと思います。日常生活に使えるからです。例えば、大学の食堂で食べ物を買うときや先生と相談するときや病院へ行くときなどです。

また、このコースにもいろいろな活動があって、楽しかったです。例えば、ロールプレー、はいくをつくること、日本人のゲストと話すこと、ホームビジットです。

先生がたも親切で、ていねいに教えてくださいました。本当にお世話になりました。

KHIN EI EI KHAING（ミャンマー）

ミャンマーのイーイーです。去年の10月5日に日本にきました。国では小学校の教師でした。今、日本で勉強することができて、私の夢は本当にな

りました。

日本へ来る前に日本はとても寒いとか地震もあるとか聞いたことがあるので、日本で生活するのが心配でした。薬もたくさん持ってきました。日本に来て一番困ったことは買い物です。日本語も話せないし、漢字も読めないし、ほしい物が何も買えませんでした。でも、今は大丈夫になりました。

日本語の授業では、ホームビジットとかホームステイなどのプログラムがあって、日本人の生活や文化なども勉強できてとても役に立ちました。いろいろな国の友達もできました。私はこれからもっとがんばります。名古屋大学で勉強したことをずっと忘れたいと思います。先生方、みなさん、ありがとうございました。

AMIROVA NARGHIZA FARKHATOVND
（ウズベキスタン）

日本に留学する前に日本の生活になれるか、日本人の人々と友達になれるかということで少し心配していました。私の場合は専門の勉強は英語ですが、留学している国の言語が分からないと満足な生活ができないと思っていました。名古屋に来てから名古屋大学の留学生センターで日本語を勉強する機会に恵まれました。素晴らしい先生がたや、教え方の効果的な方法や、勉強の有効なプログラムなどのおかげで、今、日本語で話せるようになりました。日本人の友達もできましたし、生活にもなれました。日本語の授業はどれも大変面白くて、楽しかったです。ホットなディスカッションやインタビューや会話練習などのような活動がたくさんありました。授業の時面白くて、有用な情報をいろいろ教えていただきました。何か分からない時、先生がいつも手伝ってくださいました。日本語のコースは一生忘れられないと思います。先生方に本当にいろいろお世話になりました。心から感謝しております。もうすぐ専門の勉強が始まりますが、留学生センターで日本語の勉強をぜひ続けて行きたいです。

公開シンポジウム「公と私の日本近代」開催

大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月5日(土) 文学研究科237講義室において、一般市民を対象とした公開シンポジウム「公と私の日本近代」を約220名参加のもと開催しました。

今回のシンポジウムでは、「言語・映像・博覧会・歴史の語りを通して、近代日本における公と私について考える」という趣旨のもと、日本史学・映画学・言語学の多様な立場から報告がありました。司会の坪井秀人同研究科教授に



会場からの質問に答えるパネリスト

よる趣旨説明の後、羽賀祥二同研究科教授が、「博覧会と歴史祭典」と題して、1910年開催の名古屋市の博覧会を取り上げ、地域の公共性の構築に果たした意義について、続いて、藤木秀朗同研究科助教授が、「イメージ消費をめぐる公私の変容」と題して、戦間期の日本映画におけるスター形成について画像資料を交えながら報告しました。後半では、成田龍一日本女子大学人間社会学部教授が、「反覆する戦記・書き直される戦記」と題して、戦記が書かれることで個人の体験がどのように公共化され、戦後空間の中で変容したかについて報告した後、イ・ヨンスクー橋大学言語社会研究科教授が、「公共性と言語の関係」と題して、自然性をまもってきた近代日本語の問題を公用語論などの今日の議論に接続させる報告及び多言語性への寛容な社会の構築の提言を行いました。最後に、パネリストが会場から寄せられた多くの質問に回答する形でシンポジウムは終了しました。

なお、このシンポジウムの内容は、報告書としてまとめ公表する予定です。

知的医用画像診断国際シンポジウム開催

「多次元医用画像の知的診断支援」に関するシンポジウム(実行委員長:小畑秀文東京農工大学教授、運営委員長:末永康仁情報科学研究科教授、森 健策情報科学研究科助教授)が、3月5日(土)-7日(月)の3日間、IB電子情報館において、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「多次元医用画像の知的診断支援」、本学21世紀COEプログラム「社会情報基盤のための音声・映像の知的統合」(拠点リーダー:末永教授)及び本学医工連携委員会の共催で開催されました。

シンポジウムは、平野総長のあいさつに始まり、ドイツ・ハンブルグ大学のヘーネ博士、米国メイヨークリニックのロブ教授、米国国立衛生院(NIH)のサマーズ博士、米国コーネル大学のリーブス教授の招待講演及び特定領域研究グループの発表が行われました。この特定領域では、CT又はMRIといった医用画像撮影装置から得られる画像の効率的な診断を支援する「コンピュータ支援画像診断システム」の開発を目指した研究が行われており、同シンポジウムにおいては、人体内部の様子を高精細に記録した医用画像から複数臓器・複数疾患をコンピュータが認識し、効果的に提示する未来型コンピュータ支援画像診断システム

を開発する上で必要な技術について、各研究グループから発表がありました。3日間で、延べ360名に及ぶ医学、工学、情報科学の分野の研究者が参加し、熱心な議論が行われました。

なお、同特定領域研究に関する情報については <http://www.future-cad.org/fcad> をご覧ください。



CT画像を用いた大腸ポリープ検査を支援するシステムに関して最新の研究成果を発表するサマーズ博士

名大機械・航空テクノフロンティア開催

本学機械・航空系及びマイクロナノ COE は、中部 TLO と共催で、3月8日（火）吹上ホールにおいて、「名大機械・航空テクノフロンティア - 研究公開と産学連携 - 」を開催しました。

これは、機械・航空の研究に対する理解を深めてもらうとともに、最新の技術シーズを提供し、産学連携を積極的に推進することにより、社会貢献を図ることを目的として



展示会場風景

開催されたもので、当日は、約300名の来場がありました。

講演会では、澤木工学研究科長のあいさつ、田中啓介機械・航空工学科長の開催趣旨説明の後、「21世紀 COE プログラム『情報社会を担うマイクロメカトロニクス』」（三矢保永工学研究科教授）「航空宇宙工学の散歩道、そこから生まれるもの」（梅村 章工学研究科教授）「からくり今昔」（末永良一工学研究科教授）「中部 TLO の事業紹介」（徳永良邦 名古屋産業科学研究所所長）「トヨタの F1 への挑戦」（服部哲夫トヨタ自動車(株)専務取締役）の講演が行われ、熱心にメモを取りながら聞く来場者の姿が多く見られました。

また、展示会場にも企業の研究開発担当者等が多数訪れ、各ブースの担当者と実用化に向けての相談や意見交換を行うなど、終日賑わいをみせていました。

機械・航空系単独で、このような催しを開催するのは初の試みであったにも関わらず、多くの来場者があり、企業側が、今回の催しに対して高い関心と大きな期待をもっていることを伺わせました。

国際シンポジウム「境界と文化創造」開催

大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、3月3日（木）・4日（金）の2日間、国際シンポジウム「境界と文化創造 - 東アジアの中の日本（古代・中世の人・神・仏） - 」を開催しました。

シンポジウムには、日本側から、海外でも活躍する小峯和明立教大学教授、増尾伸一郎東京成徳大学助教授など、この研究分野の第一人者をはじめ、東アジアから日本を見るという視点も重視する古代・中世思想研究の専門家が5名、ヨーロッパから同様な若手の研究者5名が参加し、発表やパネルディスカッションを行いました。

発表では、外国人発表者の日本研究のレベルの高さに、日本側の発表者は注目し、また、パネルディスカッションでは、相互の研究視野の問題点について積極的な意見が出されました。初日は「穢」感の問題、2日目はアジアの思想の日本への影響を中心に討論が行なわれ、改めて日本的意識とされる「穢」感やアジア思想の影響度を再考する機会となりました。将来的に、この問題等をテーマに、改めてシンポジウムを開催することで発表者一同の意見が一致しました。また、多数の古代・中世日本の研究者が日本全国から来場し、様々な質問や意見が出されました。

なお、このシンポジウムの報告は、平成17年9月に国際

シンポジウムの特集号「共生する神・人・仏 - 日本とフランスの学術交流 - 」として専門雑誌に掲載される予定です。



シンポジウムの様子

メディアプロフェッショナル論講座 公開シンポジウム開催

大学院国際言語文化研究科



大学院国際言語文化研究科は、3月14日（月）、文系総合館カンファレンスホールにおいて、メディアプロフェッショナル論講座公開シンポジウム「近未来のメディア・サービス～NeedsとSeedsのはざまに?!～」を開催しました。

このシンポジウムは、デジタル化をキーに変革が進行する「新聞」、「放送」、「通信」のメディア業界の現状を検証しながら、近未来の新しいメディア・サービスのあり方を模索するために開催されたもので、平成13年7月11日に開催された同講座開設記念シンポジウム（コロンビア大学教授のジェラルド・カーティス氏による基調講演「変化する国際情勢とメディアへの期待」と6名のパネリストによるパネルディスカッション「これからのメディアを担う人」）に続き2回目となります。会場は、100名を超える聴衆で、立ち見も出るほどの盛況となり、また、報道陣も多数訪れるなど関心の高さを伺わせました。

シンポジウムでは、近藤国際言語文化研究科長による主催者あいさつの後、大島宏彦氏（中日新聞社最高顧問）が息の長い活字メディア文化の存在意義を説いた上で、人間の判断能力を超える膨大な量の情報が高速度で流通する高度情報化時代にどう対処すべきかと問題提起を行いました。次に、伊藤卓志氏（NTT西日本取締役名古屋支店長）

が、通信と放送の融合、双方向化、消費者が欲しい情報を選ぶ時代と情報通信サービスの動向を解説し、川上 淳氏（NHK総合企画室特別主幹・前名古屋放送局長）が、デジタル化とインターネットが個人の自由な発信を可能にした、情報量の膨大さにも関わらず出所をたどってみると見かけほど情報が多様ではないことが分かる、むしろ情報の質や発信者の責任の問題が重要と指摘しました。続いて、安井義博氏（ブラザー工業株式会社代表取締役会長）が、着メロ、通信カラオケ等を例に挙げ、マルチメディアコンテンツによるビジネスモデル展開の動向を紹介しました。コーディネーターの山根一真氏（ノンフィクション作家、愛・地球博愛知県プロデューサー）は、終始議論を刺激的にリードしつつ、自分はいつも万年筆を持ち歩いていることや、意見・情報の公表には必ずメールアドレスを付けていること等、背景を欠いた匿名の情報による多対多・情報社会の不確かさ・不安定さを緩和しようとしていることに触れ、本来コミュニケーションとは何であるかを教育の場で取り上げるべきではないか、もっと社会・文化論としてのメディア研究を企業と大学は協力し積極的に進めて欲しいと締め括りました。



国際シンポジウム

「文理融合型エコシステム科学の創成」開催

エコトピア科学研究機構

国際シンポジウム「文理融合型エコシステム科学の創成 (Birth of Socio-ecosystem Science)」(代表：片山新太エコトピア科学研究機構教授)が、3月3日(木)、シンポジオンホールにおいて開催されました。

このシンポジウムは、エコトピア科学研究機構のエコロジー・エコシステム系の融合研究プロジェクトの一環として、総長裁量経費を得て開催されたものです。同プロジェ



講演する Dr. WU, Xiaofeng

クトでは、エコトピア科学の他、生命農学、医学、経済学、環境学、情報科学、工学の分野からメンバーが集まり、持続可能な都市代謝・自然生態系の調和システムを実現するための各学問分野の統合化を目指し、循環型都市形成、経済圏における物質循環など多様な課題の議論を進めています。

シンポジウムでは、「環境負荷物質と自然生態系の浄化容量のバランス」をめぐる議論が行われました。中国における水環境 (Dr. WU, Xiaofeng, Tsinghua Univ., China)、環境政策 (細田大造氏, 総務省自治行政局)、生態系モニタリング (和田英太郎氏, JAMSTEC)、環境経済 (Prof. CHUNG, Hyun-Sik, Sungkyunkwan Univ., South Korea) に関する4題の招待講演の後、同プロジェクトメンバーからエコシステム科学 (Socio-Ecosystem Science) へのアプローチが紹介されました。また、パネルディスカッションでは、エコシステム科学に対する各研究分野のアプローチ、文理融合の必要性、日本・アジアにおける技術移転 (小野川和延氏, UNCRD)、将来展望等について会場参加者も加わり意見交換が行われました。

高等教育研究センター客員教授セミナー 「名古屋大学のブランド力」開催

高等教育研究センター客員教授 (株)リクルート『カレッジマネジメント』編集長・中津井泉氏)セミナーが、3月2日(水)教養教育院第一会議室において開催されました。

このセミナーは、私立大学の募集戦略を手がかりとして、名古屋大学のブランド力の構築を試みることで、リクルートによる東海地区における募集ブランド力調査の結果報告の2部構成で行われました。

第一部では、「私立大学における学習募集の成功の秘訣は、広報内容である」との考えを基に、広報内容は、学部学科のポテンシャルパワー、入試制度、高校生の抱くブランドイメージが重要であることが挙げられました。第二部の東海地区における募集ブランド力調査の結果報告では、東海地区の高校生9,670名を対象として実施された大学のa) 知名度の高さ、b) 興味度の高さ、c) 入学難易度 (志願度) の高さに関する調査結果が報告されました。この調査は、高校生の大学に対するイメージが、「知名 (大学名を知ること) 大学に対する興味の発生 入学する意志」に変化していく段階に注目したもので、同調査の結果として、本学は、知名度、興味度及び志願度のいずれも極めて高い位置にあるとのことでした。セミナー後の意見交換で

は、中津井氏と参加者との活発な質疑応答が行われました。

なお、講演の詳細については、<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/nakatsui/> をご覧ください。



講演する中津井氏

ICCAE2004年度第11・12回オープンセミナー開催

農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、3月3日(木)「ブラジルの森林資源開発・保全問題に関する国際教育協力の可能性を求めて」をテーマに、2004年度第11回オープンセミナーを開催しました。講師は、同センター客員教授としてパラナ連邦大学(ブラジル)から来日中のロベルト・T・ホソカワ教授で、アマゾン熱帯林などブラジルの森林資源の開発が、今日では国際的な環境保全の世論の中で、一



講演するロベルト・T・ホソカワ教授

の経済的な利害に基づく判断だけでは進められない状況となっていること、しかも同国の森林資源開発・保全問題をめぐっては、解決を迫られている今日的な課題が多く顕在化しつつあり、同国の林学・木材科学分野では、先進諸国の研究者との国際教育協力の必要性が高まっていること等について講演しました。

また、3月11日(金)には、「日本の大学における農学教育カリキュラムの解析」をテーマに、第12回オープンセミナーが開催され、講師の田島淳史氏(筑波大学)が、農学教育カリキュラムデータベース(AgBase)を作成し、1983年から2003年までの日本における農学教育カリキュラムの解析結果について報告しました。全体的な特徴として、一科目あたりの単位数が2.15単位から1.96単位に減少、必修科目は33%から23%に減少、開設科目数の増加が認められたと指摘しました。また、開設科目の名称は、農学、工学、林学、農芸、畜産、園芸等、農学部設置要項で示されている名称が1980年代の後半から急速に減少し、改組を行った大学での学科名の特徴として、生物、環境、機能、生産等のキーワードが多く用いられていると話しました。

博物館が平成16年度地域貢献特別支援事業を実施

博物館は、平成16年度地域貢献特別支援事業「名古屋大学博物館と地域の博物館等との連携によるジュニア・キュレーターの育成」として、「地球教室 - 2000万年前の化石採集(野外実習)と観察 -」を実施しました。

この事業は、名古屋市科学館と連携して、理科離れ・自然離れした小中学生を対象に、創造的探究心と健全な自然観をもち、モノを見て考えることのできる若者(ジュニア・キュレーター)を育成し、人材育成で地域貢献を果たすことを目的として実施されたものです。

事前・事後学習及び野外実習からなるこの教室は、3月5日(土) 3月12日(土) 3月13日(日)の3日間の日程で、小学5年生から中学3年生までの21名が参加して行われました。5日に本学博物館で行われた事前学習会では、化石のでき方、化石から何が分かるかについて解説があり、また、12日に瑞浪市で実施された現地学習会では、土岐川の河床での地層観察と化石採集が行われました。翌日には、名古屋市科学館で事後学習会が行われ、採集した化石をタガネや小刀できれいにクリーニングし、学名を付ける作業に挑戦しました。採取した岩石からクリーニングによって、きれいな形の巻貝などが現われてくるたびに歓声があがり

ました。

なお、参加者が採集した化石は、名古屋市科学館及び本学博物館のジュニア・キュレーターコーナーで展示されました。



採取した化石のクリーニングを行う参加者

理学部の研究紹介ビデオが科学技術映像祭で 文部科学大臣賞を受賞



SCIENCE ~名古屋大学が解き明かす宇宙、地球、生命、そして物質~

理学部の研究紹介ビデオ（31分）が、第46回（平成17年度）科学技術映像祭の科学教育部門で文部科学大臣賞を受賞しました。

このビデオは、理学部を構成する5つの学科（化学、生命理学、物理学、数理学、地球惑星科学）全てが21世紀COEプログラムに採択されたことを受け、同学部の行っている研究の一端を高校生や一般の方々に分かりやすく紹介することを目的に作成されたものです。各学科の研究の羅列的な紹介になることを避け、物理学と数学が相互に刺激しながら発展し、地球環境や生命科学は当該部局以外に化学や物理の視点からも研究が進んでいることなど、学問が相互に関連していることを理解してもらう工夫がされています。また、研究が国際的な規模で展開され、若い研究者が育っている様子も紹介されています。映像は豊田講堂の大スクリーンで映してもきれいで、音響効果にも細心の注意が払われています。学内の方々もぜひご覧ください（問い合わせ先：理学部庶務掛052-789-2394）。

小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会開催

留学生センター

留学生センターは、3月12日（土）、あいち国際プラザにおいて、東海地方の小中学校教員と日本語ボランティア現職者を対象にした研修会「外国人児童・生徒をめぐる学校と地域」を開催しました。

この研修会は、愛知県国際交流協会、名古屋国際センター、東海日本語ネットワークとの共催で行われ、定員60名に対して95名の参加がありました。同センターとこの3団体との連携は4年前に始まり、一昨年は地域の日本語教室の運営をテーマに、昨年は小中学校の異文化理解教育をテーマに研修会を開催し、今年が3回目となります。

講師は、大阪市のセンター校で15年以上も外国人児童・生徒の教育に携わってきた田中 薫氏（大阪市立豊崎中学校教諭、関西地区日本語指導者研究会事務局代表）で、「学力につながる日本語指導 - 教師とボランティアの役割 - 」と題して講演し、経験に裏付けられた独自の指導法を披露しました。続いて、参加者との質疑応答があり、東海地方の事情に詳しい松本一子愛知淑徳大学非常勤講師からもコメントが寄せられました。休憩時間には、会場のあいち国際プラザに開設されている「日本語教育リソースルーム」の見学も行われました。



講演する田中氏

2.23

ロシア科学アカデミー コンピュータ支援設計研究所長等

Oleg Mikhailovich Belotserkovskii ロシア科学アカデミーコンピュータ支援設計研究所長及び Elena R. Pavlyukova 同研究所国際協力部門次長が訪問され、本学との学术交流推進に関し懇談が行われました。

同所長等は、2月24日に大学院工学研究科との部局間学术交流協定締結（調印式）のために来学され、その際に訪問されたものです。



2.25

在日ウズベキスタン共和国大使館特命全権大使等

Mirsabit F.Ochilov 在日ウズベキスタン共和国大使館特命全権大使及び K. Shakirov 同大使館貿易・経済担当参事官が訪問され、同国が参加する愛知万博の事業に対する支援要請と、それらを含めた本学との学术交流推進について懇談が行われました。



3. 7

在日オーストラリア大使館参事官

Patrick Cremen 在日オーストラリア大使館教育・科学・訓練担当参事官が新任のあいさつのため訪問され、同国の学術機関との交流の現状及び同国との学术交流の強化に関し大使館として協力できる事項等について意見交換が行われました。

3.22

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 知的財産部戦略的連携担当ディレクター

David Lundberg カリフォルニア大学ロサンゼルス校知的財産部戦略的連携担当ディレクターが訪問され、本学との大学間学术交流協定締結の可能性を含めた今後の学术交流推進等について懇談が行われました。

3.23

スラバヤ国立大学長等

H.Haris Supratno スラバヤ国立大学長、Sunarto,M.Sc. 同大学副学長及び Yoyok Soesatyo, S.H.,M.M. 同大学社会科学部長が訪問され、本学との学生交流協定の更新及び今後の交流促進について懇談が行われました。



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H16. 8. 5	第4回日本進化学会 研究奨励賞	大学院理学研究科講師	熊澤 慶伯	
H16.10.22	International Conference on Laser Probing 2004 Young Scientist Award Committee	大学院工学研究科助手	渡辺 賢一	樋口雄紀(大学院工学研究科 M1)、河原林順(大学院工学研究科助教授)、井口哲夫(大学院工学研究科教授)と共著
H16.11.10	Fellow, Institute of Physics	大学院工学研究科教授	石川 孝司	
H16.12.24	第15回日本 MRS 学術シンポジウム奨励賞	大学院工学研究科助手	永野 修作	
H17. 1. 4	医科器械史研究賞	大学院医学系研究科教授	三宅 養三	
H17. 1.20	第43回日本セラミックス協会基礎科学討論会 国際セッションプレゼンテーション賞	大学院工学研究科助手	増田 佳丈	河本邦仁(大学院工学研究科教授)と連名
H17. 2. 4	日本臨床微生物学会 学術奨励賞	医学部保健学科助手	川村久美子	
H17. 2.14	TMS2005 134th ANNUAL MEETING & EXHIBITION HUME-ROTHERY AWARD LECTURE	大学院工学研究科教授	水谷宇一郎	
H17. 2.18	第1回日本学術振興会賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H17. 2.18	日本材料学会線材強度部門委員会業績賞	大学院工学研究科助教授	秋庭 義明	
H17. 2.19	2004年度日本建築学会東海賞	大学院環境学研究科助手	呉 明儿	H16.12.31退職
H17. 2.24	社団法人有機合成化学協会研究企画賞	大学院工学研究科助教授	山本 芳彦	
H17. 3.11	日本機械学会東海支部 研究賞	大学院情報科学研究科教授	峯村 吉泰	
H17. 3.11	日本機械学会東海支部 功績賞	大学院工学研究科教授	三矢 保永	
H17. 3.18	第22回永井科学技術財団学術賞	大学院工学研究科助教授	岩井 一彦	
H17. 3.22	第20回電気通信普及財団賞(テレコムシステム技術奨励賞)	大学院情報科学研究科教授	村瀬 洋	永野秀尚、黒住隆行、柏野邦夫(3名ともNTTコミュニケーション科学基礎研究所)と連名
H17. 3.22	2004年度日本機械学会 船井賞	大学院工学研究科助教授	福澤 健二	伊藤伸太郎(大学院工学研究科 D2)、張賀東(大学院情報科学研究科助手)と連名
H17. 3.31	日本金属学会 本多記念講演賞	大学院工学研究科教授	坂 公恭	

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H16. 4.22	中国第6回全国実験動物学会(杭州)学術大会優秀論文賞	大学院生命農学研究科 M2	陳 自艶	早坂 静(環境医学研究所技術補佐員)、高岸芳子(環境医学研究所助手)、織田銃一(大学院生命農学研究科助教授)、村田善晴(環境医学研究所教授)と連名
H16.10. 9	日本哺乳類学会 奨励賞	大学院生命農学研究科研究生	川田伸一郎	
H16.12. 2	日本燃焼学会 ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 D1	林 直樹	中村祐二(エコトピア科学研究機構講師)、山下博史(大学院工学研究科教授)と連名
H16.12. 2	日本燃焼学会 優秀作品賞	大学院工学研究科 M1	馬目 聡	中村祐二(エコトピア科学研究機構講師)、林 直樹(大学院工学研究科 D1)、山下博史(大学院工学研究科教授)と連名
H16.12.24	第15回日本 MRS 学術シンポジウム 奨励賞	大学院工学研究科 M2	金子 幸広	梅山基樹(大学院工学研究科 M1)、近藤博基(大学院工学研究科助手)、坂下満男(大学院工学研究科助手)、酒井 朗(大学院工学研究科助教授)、小川正毅(エコトピア科学研究機構教授)、財満鎮明(大学院工学研究科教授)、安田幸夫(名誉教授)と共著
H17. 1.31	電気学会 論文発表 B賞	大学院工学研究科 M2	柳野 晶樹	
H17. 1.31	電気学会 論文発表 B賞	大学院工学研究科 M1	野口 真希	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17. 3. 4	情報処理学会第67回全国大会 学生奨励賞	大学院情報科学研究科 M2	大江 展弘	平野 靖(情報連携基盤センター助教授) 梶田将司(情報連携基盤センター助教授) 間瀬健二(情報連携基盤センター教授) と連名
H17. 3. 8	GSC シンポジウム ポスター賞	大学院工学研究科 D1	板倉 剛	伊藤秀章(エコトピア科学研究機構教授) 笹井 亮(エコトピア科学研究機構助手) と連名
H17. 3.22	電子情報通信学会 平成16年度学術奨励賞	大学院工学研究科 D2	田中 雅光	
H17. 3.25	日本理学療法士協会 優秀賞	医学部保健学科 4年	森坂 文子	
H17. 3.28	第17回応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 D3	山川 晃司	堀 勝(大学院工学研究科教授) 後藤俊夫(大学院工学研究科教授) 田昭治(片桐エンジニアリング) 片桐年郎(片桐エンジニアリング) 加納浩之(NUエコエンジニアリング)と共著
H17. 3.29	第17回応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 D2	田中 雅光	

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年3月]

記事	年月日	新聞等名
1 大津波から助かるには スマトラ沖地震調査団・木村玲欧・災害対策室助手に聞く	3. 1(火)	中日(朝刊)
2 教育発達科学研究科で開催された「中高年者のための人生・キャリア再設計セミナー」「生き方探し」に一役	3. 1(火)	中日(朝刊)
3 情報文化学部の主催で情報文化シンポジウム3日、4日開催 「文理融合型学部の基礎教育とは何か」などテーマに講演、討論	3. 1(火)	中日(朝刊)
4 宮治昭・文学研究科教授 放射性炭素年代測定でパーミヤン遺跡年代論に一石	3. 2(水)	朝日(夕刊)
5 法学研究科は9月7日に「名古屋大学日本法教育研究センター」をウズベキスタンに設置へ	3. 2(水)	中日(朝刊) 他3社
6 アルツハイマー病の脳細胞死滅の仕組み解明 鍋島俊隆・医学部附属病院教授コメント「新治療薬になる可能性がある」	3. 2(水)	中日(夕刊)
7 「廃棄物をめぐって 愛知万博を目前に控えて」5日開催 武田邦彦・工学研究科教授が基調講演	3. 2(水)	朝日(朝刊) 読売
8 「名大機械・航空テクノフロンティア」8日開催	3. 3(木)	日刊工業
9 名古屋市長選告示まで1ヶ月近く 16年ぶりの一騎打ちか 後房雄・法学研究科教授コメント	3. 5(土)	朝日(朝刊)
10 「名古屋発・グローバル時代の大学交流～“人づくり”の現場から～」シンポジウムで基調講演行う赫翼成・中国・東北大学長インタビュー	3. 5(土)	毎日(朝刊)
11 依存性薬物に関する最新研究成果を報告する公開講座19日開催 主催する文部科学省研究班の鍋島俊隆・医学部附属病院教授は「功罪知って」と話す	3. 6(日)	朝日(朝刊)
12 がんリスクの調査を本学などが新年度から開始 10万人を20年間追跡 研究代表者の濱嶋信之・医学系研究科教授は「がん予防につなげるための基本資料を蓄えたい」と語る	3. 7(月) 3. 8(火)	朝日(朝刊) 日経(夕刊) 中日(朝刊)
13 名大サロンの主役：北村友人・国際開発研究科助教授 心に平和の岩築こう	3. 8(火)	中日(朝刊)
14 公開シンポジウム「近未来のメディア・サービス～NeedsとSeedsのはざまに?!～」14日開催 国際言語文化研究科メディアプロフェッショナル論講座主催	3. 8(火) 3.10(木) 3.22(火)	中日(朝刊)
15 第46回科学技術映像祭の入賞15作品発表 文部科学大臣賞に「SCIENCE 名古屋大学が解き明かす宇宙、地球、生命、そして物質」(企画：理学研究科、制作：日本テレビ)など	3. 8(火) 3.12(土) 3.19(土)	日刊工業 毎日(朝刊) 朝日(夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年3月]

記事	月日	新聞等名
16 8日前期日程の合格発表 9学部で1610人が合格	3.8(火) 3.9(水)	中日(夕刊) 朝日(夕刊) 読売
17 来年4月東山キャンパスに設置する学内保育所の説明会 8日開催	3.9(水)	中日(朝刊)
18 豊田久亀・教育発達科学研究科教授 学力とは自ら考える力	3.9(水)	朝日(夕刊)
19 COE オープン・レクチャー 木俣元一・文学研究科教授の「アイコンとコイン～聖像と貨幣をめぐる考察」16日開催	3.9(水) 3.16(水)	朝日(夕刊) 中日(朝刊)
20 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 「正常な老い」は難しい	3.10(木)	朝日(朝刊)
21 岐阜県可児市議選 電子投票「無効」判決 横井茂樹・情報科学研究科教授コメント「リスクの考慮必要」	3.10(木)	読売
22 なごや東西南北ストーリー vol.1：総論 名古屋らしい文化創造 清水裕之・環境学研究科教授と名古屋市整備公社の高木勝義理事長の対談	3.10(木)	毎日(朝刊)
23 アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 町とアートが循環する	3.11(金)	朝日(夕刊)
24 東海地方2月の地震：林能成・災害対策室助手	3.11(金)	読売
25 『中高校生の君たちへ ノーベル賞受賞者との対話』出版 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら5人の日本人ノーベル賞受賞者の講演と生徒たちとの対話が本に	3.11(金)	読売
26 ニッポン見聞録：コーチャル・リトゥさん・本学大学院生 彩りは日本食の味	3.11(金)	朝日(夕刊)
27 「名古屋発・グローバル時代の大学交流～“人づくり”の現場から」11日本学で開催 赫冀成・中国・東北大学長が基調講演、パネルディスカッションには山本進一理事が出席	3.12(土)	毎日(夕刊)
28 庄内川とすべての川の源流を考えるシンポジウム」12日開催 服部重昭・生命農学研究科教授がコーディネーター	3.13(日)	読売
29 池内了・理学研究科教授著「寺田寅彦と現代」書評	3.13(日)	中日(朝刊)
30 池内了・理学研究科教授著「考えてみれば不思議なこと」書評	3.13(日)	読売
31 科学技術振興機構は委託開発事業の採択課題として16件選定 代表研究者に大澤俊彦・生命農学研究科教授、木方洋二・本学名誉教授ら	3.15(火)	日刊工業
32 東海3県の大学医学部教授ら10人今月末退職 本学では三宅養三・医学系研究科教授、中村蓼吾・同教授、西村正彦・同教授	3.15(火)	読売
33 ベイオフに備える：自己責任 本学では経済学部教授らによる資金管理の学内委員会を発足	3.15(火)	中日(朝刊)
34 福田敏男・工学研究科教授がクレーン車のアーム先端に二種類の探査装置を取り付けた地雷探知ロボットを開発	3.15(火)	中日(夕刊)
35 東海学術奨励会の本年度助成金交付対象者に林能成・災害対策室助手ら15人決定	3.16(水)	中日(朝刊)
36 国際シンポジウム「ヨーロッパにおける企業買収法」中東正文・法学研究科助教授がUFJ銀行をめぐる事例について論じる	3.16(水)	中日(朝刊)
37 活動通信：劇団新生・本学公認サークル 楽しい企画で新入生を歓迎	3.16(水)	中日(朝刊)
38 学生街ダンス：エコビジネス研究会 講演会・パネルディスカッション「廃棄物をめぐって 愛知万博を目前に控えて」で武田邦彦・工学研究科教授は容器包装のリサイクルの問題点を指摘	3.16(水)	中日(朝刊)
39 読売新聞社のインターンシップ事業 本学など約10校の大学生40人が万博会場で記者体験	3.17(木)	読売
40 永井科学技術財団は2004年度の財団賞に岩井一彦・工学研究科助教授ら8件と国際交流助成金2件決定	3.18(金)	日刊工業
41 「ロースクール奨学金ちゅうぶ」は第2期奨学生に萩浩太郎さん・本学法科大学院生ら4人決定	3.18(金)	読売
42 ニッポン見聞録：陳芬慧さん・本学大学院生 年金制度に思う	3.18(金)	朝日(夕刊)
43 「第1回中国語スピーチコンテスト」名古屋中国語学院長・平井勝利・本学名誉教授ら4人が発音など審査	3.20(日)	中日(朝刊)
44 稲森財団は2005年度研究助成対象者 川平友規・多元数理科学研究科助手、梶村恒・生命農学研究科助手ら50人決定	3.21(月)	日刊工業
45 福岡県西方沖地震と予想される東海地震を比較 安藤雅孝・環境学研究科教授は「東海地震はもっと大きな揺れを想定」と指摘	3.21(月)	中日(朝刊)
46 エコトピア科学研究機構は愛知県や名古屋市などと「自然の叡智」を研究 循環・再生型社会構築を目指す	3.22(火)	中日(朝刊)
47 愛知芸術文化センター総長・加藤延夫・本学名誉教授の後任に森正夫・本学名誉教授決定	3.22(火)	中日(夕刊)
48 博物館特別展「時を測る 地球誕生から中世まで」「CHIME年代測定法」「炭素14年代測定法」の原理や仕組みの解説など	3.22(火)	中日(朝刊)
49 池内了・理学研究科教授のお別れセミナー開催「新手法に挑戦を」若手にエール	3.23(水)	中日(朝刊)
50 佐藤安信・国際開発研究科教授 平和の構築 難民に学べ	3.23(水)	朝日(夕刊)
51 異分野研究者の討論会「KOSMOSフォーラム」13日本学で開催	3.23(水)	中日(朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年3月]

記事	月日	新聞等名
52 教育学部は4月から始まる前期授業の一部を一般市民に公開 受講者募集	3.23(水)	中日(朝刊)
53 石原一彰・工学研究科教授らの研究グループ エステルの環境に優しい合成技術を開発	3.24(木)	日刊工業
54 研究スポット:大幸医療センターではピロリ菌の対策に力 濱嶋信之・医学系研究科教授は「胃がん予防に効果」と話す	3.25(金)	中日(朝刊)
55 私の視点:上出洋介・太陽地球環境研究所教授 科学技術政策 基礎研究重視した予算に	3.25(金)	朝日(朝刊)
56 訃報:坂本順・本学名誉教授	3.25(金)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
57 25日に卒業式 学部と大学院を合わせて計3993人が卒業 平野真一総長は式辞で「二十一世紀は全地球規模で持続可能な発展を図ることが責務」と強調	3.25(金)	中日(朝刊)
58 山口拓史・大学文書資料室助手が戦時下の旧帝大時代に東山キャンパス設置計画の参考に製作した立体模型を発見 田村春吉・第2代総長が医学部長時代に島津製作所に依頼したもの	3.26(土)	中日(夕刊)
59 三菱東京UFJ新銀行へ:家森信善・経済学研究科教授が東海銀行からUFJ銀行、三菱東京UFJ銀行へと移る一連の動きを総括	3.26(土)	朝日(朝刊)
60 工学研究科と情報科学研究科は25日に東芝と大学院生を対象にした研究インターンシップ協定を締結	3.26(土) 3.28(月)	中日(朝刊) 日刊工業
61 スマトラ沖地震津波現地調査で海津正倫・環境学研究科教授らは「引き波」が低地に集中して流れ込んでいたことを明らかに	3.27(日)	中日(朝刊)
62 地域防災を考えるシンポジウム「まちとひとを守るために いま何をすべきか」を環境学研究科と災害対策室の共催で26日開催	3.27(日)	中日(朝刊)
63 25日に「総長顕彰」の授与式 「学修への取り組み」部門と「正課外活動への取り組み」部門で計9件の個人・団体が受賞	3.29(火) 3.30(水)	中日(朝刊) 読売
64 解説:地震発生確率 鈴木康弘・環境学研究科教授は「残念だが、(活断層を)98に絞った評価には限界がある」と話す	3.29(火)	読売
65 附属図書館春季特別展「地域環境史を考える」4月4日~27日開催	3.29(火)	中日(朝刊)
66 学生之新聞:今春定年の教授からメッセージ 北川勝弘・農学国際教育協力研究センター教授「周りに喜びをもたらすような生き方を」	3.29(火)	中日(朝刊)
67 学生街ダンス:就活サポーター委員長・今永典秀さん・本学4年生 後輩の相談相手に	3.29(火)	中日(朝刊)
68 日本科学未来館の「ライブトーク・サイエンス・エッジ」2月に講演した富田淳さん・本学大学院生は「自分の研究を考え直す機会になった」と話す	3.29(火)	中日(夕刊)
69 トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長・豊田章一郎・全学同窓会会長がシラク大統領から「レジオン・ドヌール勲章」を直接授与	3.29(火)	中日(朝刊)
70 宮尾克・情報連携基盤センター教授と岡本耕平・環境学研究科教授らのグループは地震の災害情報を4ヶ国語に自動翻訳するシステムをインターネット上で公開	3.30(水)	中日(朝刊)
71 第3回「坂田・早川記念レクチャー」記念講演会を理学研究科と名古屋市科学館の共催で4月23日開催	3.30(水)	毎日(朝刊)
72 教育、法、経済、情報文化、工の5学部で後期日程の募集を廃止 教育、情報文化の両学部は新たに推薦入試を導入	3.31(木)	朝日(朝刊) 他4社
73 学章「NUマーク」や通称「名大」を商標登録	3.31(木)	毎日(朝刊)
74 「八高会」の書類や資料を大学文書資料室で永久保存する試み進む 八高会会長・山田録一・本学名誉教授ら5人の役員が2月10日訪問、50万円を寄付	2.11(金)	中日(朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月23日(水)~7月31日(日)
 場 所: 博物館
 開館時間: 10時~16時
 休 館 日: 月・火曜日
 (ただし祝休日は開館)
 入 場 料: 無料

第8回名古屋大学博物館特別展
 テー マ: 時を測る - 地球誕生から中世まで -



[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

5月10日(火)~13日(金)
 場 所: 文系総合館5階509
 時 間: 12時10分~12時50分
 対 象: 本学の教職員、大学院生
 参 加 料: 無料

高等教育研究センター第1回ランチタイムFD

目 的: 高等教育研究センターがあなたの授業改善をサポートします。本学での教育経験の少ない新任教員はもちろん、最近の学生の対応に悩んでいるベテラン教員も歓迎いたします。また、将来大学教員職をめざす大学院生も歓迎します。あなたの授業改善を4つのテーマからサポートします。関心のある回だけの参加、4回通しての参加のどちらも歓迎します。忙しい方は昼食の持ち込みも可能ですのでお気軽に参加してください。

[問い合わせ先]
 高等教育研究センターセミナー係
 (担当 中島)
 052-789-5384

テ ー マ: 10日(火) なぜ授業改善が求められているのか?
 11日(水) 学生がより学ぶための授業の方法
 12日(木) 学生の学習を支援するシラバスをつくろう
 13日(金) 学生は何を求めているのか?



5月12日(木)
 場 所: 博物館講義室
 時 間: 15時~

第39回名古屋大学博物館特別講演会

講 師: 山本直人文学研究科教授
 演 題: 弥生時代はいつ始まったのか

[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

5月23日(月)~5月27日(金)
 場 所: 名古屋国際会議場

SciCADE05 (サイケディー05)

主 催: 大学院情報科学研究科計算機数理学専攻
 共 催: 名古屋大学21世紀COEプログラム「計算科学フロンティア」、
 日本応用数学会、日本数学会
<http://math.human.nagoya-u.ac.jp/scicade05/>

[問い合わせ先]
 三井弼友情報科学研究科教授
 052-789-3075

6月5日(日)
 場 所: 博物館講義室
 時 間: 13時~

第40回名古屋大学博物館特別講演会

講 師: 赤塚次郎(愛知県埋蔵文化財センター)
 演 題: 邪馬台国時代の東海の風景
 *講演後、ギャラリートークもあります。

[問い合わせ先]
 博物館事務室 052-789-5767

名大トピックスのリニューアルにあたって

名大トピックスは、平成5年2月に、ニュース性に重点を置き、大学をめぐる新しい情勢や動向を迅速、的確に広報するための学内向け全学広報誌として創刊されました。以来10年以上にわたって、教職員をはじめとして多くの皆様に親しまれてきました。

法人化されて1年が経ち、広報活動の重要性がますます高まっている現状を踏まえ、創刊以来はじめてとなるリニューアルを行いました。

今回のリニューアルでは、名大トピックスを広く学内・学外を対象とした総合広報誌と位置づけ、ニュースに加え、読み物コーナー（研究・教育紹介コーナー、役員・学生・同窓生・職員等による執筆コーナー等）の充実を図るとともに、表紙を含めて全体のデザインを一新いたしました。

広報委員会では、皆様の声や編集会議を通じ、名大トピックスが真に本学の広報活動の顔となるよう、さらに内容等の充実を図っていく所存であります。

皆様のあたたかいご支援と、忌憚のないご意見をいただければ幸いに存じます。

広報委員会委員長 山下 廣順

[新コーナー]

知の先端

リニューアル前の研究紹介コーナー「研究ナウ」と同様、本学で行われている先端研究を紹介します。世界最高水準の学術研究を推進するために設置した「高等研究院」で行われている研究をはじめとして、各分野の研究についても紹介していく予定です。

オフタイム

役員や部局長が、日頃の運営管理の立場を離れて、趣味等を自由に書くコーナーです。

同窓生から

社会の第一線で活躍している同窓生を紹介します。「同窓生から」にご登場いただける方をぜひご紹介ください。

学生の元気

課外活動等で頑張っている名大生を紹介します。「学生の元気」にご登場いただける方をぜひご紹介ください。

世界につながる

本学の国際化の動きを様々な角度から紹介します。

名大トピックス No.143 平成17年4月28日発行

編集・発行 / 名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-789-2019 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

卒業式終了後、豊田講堂前庭で後輩とともに、晴れやかな表情で記念撮影する卒業生。



36

東山キャンパス「田村模型」

1940年当時の東山敷地全体模型

本年2月、大学文書資料室は、豊田講堂地階倉庫内で大学の歴史的遺産ともいえる二つの模型（東山キャンパス「田村模型」）を発見しました（写真1）。今回発見された模型は、名古屋帝国大学創設の翌年にあたる1940（昭和15）年夏から1941年2月頃にかけて製作されたもので、当時の名帝大医学部長である田村春吉（元名古屋医科大学総長・のちの第2代名帝大総長）が京都の島津製作所（模型部）に製作を依頼した1/1000スケール模型です（写真2）。

実は、この「田村模型」については、春光同門会編『田村春吉』（1954年刊）という文献中の山元昌之「聡明敏活」等において、その存在や作成経緯、さらには模型に対する田村の思い入れなどが触れられていましたが、現物の所在は明らかではありませんでした。そこで、大学文書資料室では昨年（2004）の春以降、模型の所在調査を開始した結果、1960年代前半の一時期には豊田講堂ロビーに置かれていたという本学元職員の目

撃情報等を得ながら模型の探索を行っていました。

この「田村模型」は、当初1/1000模型一つの製作が進められていましたが、途中、田村の指示により高さだけを1/100に変更した模型（写真3）が追加発注されました。追加模型では、現在の東山通（写真3下部）、鏡ヶ池（同右端）、東山動物園（同左端）のほか民家・街路樹なども忠実に再現されています。しかし何より先この「田村模型」の資料的価値は、名帝大創設当初の医学部東山移転構想に基づいて、医学部諸施設の中央を通る（現在の本部別館と硬式テニスコートを結ぶ）計画道路が組み込まれている点、また、東山キャンパス・プランニング用に用意された文字通り本学史上最初の東山キャンパス模型という点にあるといえます。

なお、この「田村模型」については、中日新聞（2005年3月26日付夕刊）においても取り上げられました。



- 1
- 2 1 発見時の状態（左側が完全な1/1000模型で、右側が高さのみを1/100に変更したもの）
 - 2 2 模型に貼り付けられた「島津製作所模型部」プレート
 - 3 3 模型（写真中央から上（南））に伸びているのが計画道路。模型下部を左右（東西）に走るのが現在の東山通。